

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1985

11



聖徒の道

1985年11月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：スペンサー・W・キンボール、マリオン・G・ロムニー、ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒定員会：エズラ・タフト・ベンソン、ハワード・W・ハンター、トーマス・S・モンソン、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オックス

顧問：カーロス・E・エイシー、レックス・D・ピネガー、ジョージ・P・リー、ジェームズ・M・パラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン、C・キンボール・ボット



表紙：ジョーダンリバー神殿

聖徒の道 1985年11月号第29巻第10号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円,大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA0631JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1985 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

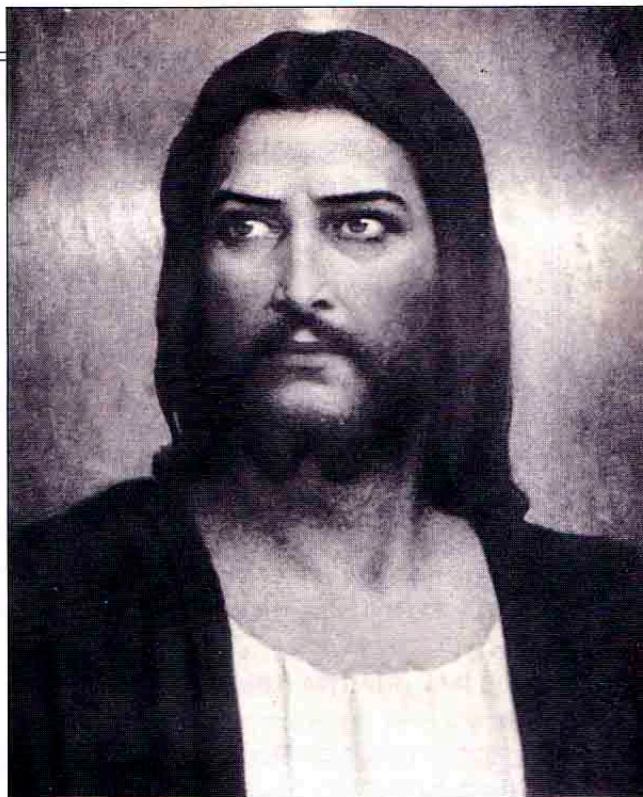
●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に資材管理部配送センターにご連絡ください。●「聖徒の道」についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820

●—もくじ

人類への主の計画	スペンサー・W・キンボール	1
それは皆さんの時代です	ニール・A・マックスウェル	4
怒りの石	ラリー・ヒラー	7
原則	ボイド・K・バックナー	13
質疑応答	マーク・E・ハースト	18
	ジョー・J・クリステンセン	19
信仰を擁護して	セオドア・M・バートン	20
良きクリスチャンになるために	カレン・リン・デビッドソン	22
各地のたより		
子供のページ(別冊付録)		
立体カレンダー		1
勝利者	マーガレット・M・ロビンソン	2
ノアのはこぶね	エンジェル・フィッツジェラルド	7

人類への 主の計画

大管長
スペンサー・W・キンボール



このメッセージは1975年6月27日の大会の説教である。

天父は、人がその幼児期から神のごとき者となるまでの成長の計画を立てられた。それは必ずしも容易な道程ではない。だが、私たちの態度いかんによっては、最も価値ある道程ともなり得るのである。

神の計画を順を追って調べてみよう。モーセは、主の予言者となったとき偉大な示現と啓示を受けた。モーセは、この世の初めにさかのぼり、しかもこの地球の創造以前からの出来事を見ることができた。

アブラハムも同様であった。創造主はアブラハムに次のように言われた。「われは主なる汝の神なれば、……われは上は諸天を支配し、下は地を支配し、あらゆる智慧に於て思慮に於て汝の太初より見たるところのすべての英智たちに勝ればなり。」(アブラハム3:19, 21)

そして主は、これら前世にいる無数の霊たちの中に立たれると次のように言われた。「われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。

而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」(アブラハム3:24-25)

「而して、神々、命じたるこれらのもの

のの従うまで見守りたまえり。」(アブラハム4:18)

この後、続いて鯨や魚や水の中の生き物、翼ある鳥が生じた。

「神々彼らの従うを見、また神々の計画の善しきを見たまえり。」(アブラハム4:21)

そして、水が生命あるもので満ち、空が翼ある生き物で満たされると、神々はこう言われた。「われら、彼らを祝福して、豊に子を産み殖え……しむべし。」(アブラハム4:22)

こうして第5の「時」、すなわち通常5日目と言われている時は終わった。

次には、生き物、家畜、はうもの、そしてあらゆる種類の獣が生じた。「而して神々かれらの従うを見たまえり。」(アブラハム4:25)

こうして地球を組織してしまうと、神神は会議を開いて言われた。「いざわれら降り行きて、われらのかたちにかたりてわれらの像の如くに人を造り、これに……治めしめん……。

ここに於て、神々降りて……人を組織したまえり。すなわち……男と女に造りたまえり。」(アブラハム4:26-27)

ここに至ってその計画は完成し、私たちも、また私たちの数知れない兄弟姉妹たちも、自然の法則に従ってこの地上へ

来て、それぞれの可能性を伸ばす機会が与えられることになった。

私たちは皆、神の霊の子供である。創造されたものの中でも最高の位に属している。地球も地球に置かれているものもみな、全人類の進歩と成長のため、また心を満たすために与えられているのである。主は言われた。

「われ誠に汝らに告ぐ、汝ら〔誠命を守れば〕地に満つるすべてのものは汝らに与えらるべし。……

然り、すべてこれら季節によりて地より生ずるものは、皆人の為人の用いんために造られ、眼を楽しませ、また等しく心を悦ばせんためなり。

然り、これらは肉体を健にし人に元氣をつくるよう、食物、衣服、味、香りのために造らる。

而して、すべてこれらのものを人に与えたるは神の悦びとするところにして、この目的のためにこれらは造られた〔り。〕(教義と聖約59:16, 18-20)

ここで計画は終わり、次にはそれを実行に移すための詳細が考慮されることになった。

こうして第6の「時」となり、神々は次のような計画を立てた。「われら彼らに豊に生ましめて多くの子孫あらしめ、地に充たさしめて地を従わさせむ。」(アブ

ラハム 4 : 28)

これはみな、思いつきによるものでもなければ、創造の過程で偶然に生じた結果でもない。実際の創造に先立って入念に計画されたものである。

こうして、「神々降り来りて天と地の生成を行いたまえ」る日がやって来た。

「神々土の塵をもて人を造り、その人の霊(すなわち人間の霊)をとりてこれをその中に入れ、その鼻孔に生命の息を吹き入れたまえり。その人すなわち生ける『霊の結合体』となりぬ。」(アブラハム 5 : 4, 7)

それから「神々……一人の女を造り、これをその男のところへ連れ来りたまえり。」(アブラハム 5 : 16)

これも、やはり神が計画されたことであった。

アダムは喜んでこう言った。「われはこれを女と名づくべし……」

この故に男はその父母を離れてその妻と結び合い二人一体となるべし。」(アブラハム 5 : 17-18)

神々はこう言われた。「いざわれらこの人にふさわしき一人の助け手を造らん。この人独りにてあるは善しからざればなり。故にわれら彼のためにふさわしき一人の助け手を造らん。」(アブラハム 5 : 14)

これまで、神々がこの天地創造の計画を立て、人間を含むあらゆるものを造り、さらにそれらに生命を与えられたということ述べてきた。神々がなされたことには、まことに目的があったのである。

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。

神は彼らを祝福して言われた、『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。……』(創世 1 : 27-28)

次のように言うこともできたであろう。「神は彼らがふえ、地に満ちるように祝福された。それは、そのような状態の中にこそ、多くの人々が知らずにいる偉大な祝福があるからである。」

子供は、決して偶然に生まれるのではない。綿密に計画された予定通りの出来事なのである。主は、ほかの方法で子供を世にもたらすことも可能だったはずである。だがそのような場合、親たちは、

どのようにして子供を愛し、育てていくことができるだろうか。

男の体と女の体は、それぞれが補い合えるように、異なって創造されたのであり、このふたつが一体となることによって妊娠が起こり、この世に生ける霊の結合体を送り出すのである。この霊は、主が幕を引かれたときにあのアブラハムが見た数知れない多くの霊のひとつである。

ここで、主が男と女を造られたのも、その種類に従って子孫を殖やすためであったということを強調しておく必要があるだろう。以来、数限りなく、このふたつのもは一体となり、男と女を世にもたらし続けているのである。そして生み出された男女の体も、今なお時の終わりまで神の霊の子供たちを世に送り出し続けることができるように造られているのである。

そして、神々は創造の「時」を終えたとき、被造物がみなことごとく従ったと言っておられる。みなその言葉に従ったのである。神々は、創造を終えた全世界とその計画とを見わたし、「はなはだ良し」と言われた。

これこそ、この全計画を正しく維持するための最もふさわしい方法であった。これにより、人は世に生まれ出で、成長するための数々の機会が与えられるのである。

偽りの才気やうわべだけの知恵しか持っていない愚かな者に、この計画には失敗があったなどと即断させてはならない。すべての計画が、愛と相互依存の精神で子供たちを世に送り出すことができるよう、入念かつ慎重に考慮されたのである。もし今日多くの人々の間ではびこっているような浅薄な考え方だけで天地創造が行なわれたとしたら、世界も人類もあらゆる正しい事柄も、とうの昔に終局を迎えていたことであろう。

パリサイ人に向かって次のような言葉を言われたのは、ほかならぬ主イエス・キリストご自身であった。まだ地上で伝道しておられた頃のことである。「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ……。』」(マタイ 19 : 4)

そして、人はその妻と結ばれるべきであるという戒めが与えられた。また『ふ

たりの者は一体となるべきである。』

彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない。」(マタイ 19 : 5-6)

それゆえ私たちの主は、離婚や家庭の崩壊という悪に対して非常に強い警告を発しておられる。

ふたりの者、すなわち夫と妻(夫と妻のみである)が一体になるということの当初の目的は、子供たちをこの世に生み出すということであった。性関係が単なる慰みであったり、欲望や情欲を満足させるものでしかないなどということは、主はまったく意図されなかったのである。夫婦間の正しい性関係はすべて子供の出産のためにのみ限定する必要がある、という主からのみ言葉があるわけではないが、アダムのときから今日に至るまで、主が放縱な性関係を認められたことがないという証拠は、数多く挙げることができる。

主の計画が秩序正しいものであると知った以上、決して、この神聖な計画を卑劣な目的に供するようなことがあってはならない。

今日、世の中には、まったくの思いあがり、サタンが計画どおりの世界を創造しようとしている人々が数多くいる。サタンは悪のはびこるのを心待ちにしているからである。

ある著名な説教者は次のように言った。「性は本来悪ではなく、善なるものを悪用することが可能だけである。」

女性が苦痛と不安のうちに子供を世に送り出すことは決してたやすいことではない。だが、それでもなお、妻は夫を慕うべきである。夫が妻を管理するからである。また、男は顔に汗してその家族を養わなければならないが、これもやはり容易なことではない。だが、これこそ神の計画なのである。(創世 3 : 16-19 参照)そしてそこから、偉大な祝福がもたらされるのである。

聖典の中で、人類の創造について書かれている箇所ではほとんど全部と言ってよいほど、「男と女」という言葉が使われている。モーセは創世記の 5 章で「神が人を創造された時、神にかたどって造り」(創世 5 : 1)と記録している。これも、



何ら不可解な表現ではない。私たちは皆ひとり残らず、神のかたちに造られており、最終的には、神に、王に、女王になり得るのである。

「彼らを男と女とに創造された。彼らが創造された時、神は彼らを祝福して、その名をアダムと名づけられた。」(創世5:2)

アダムという名が彼らの名であった。私は、このアダムという名が、ちょうどキンボールが私の名であり私の妻の名でもあるように、彼らの名字ではなかったかと考えている。

女がアダムのもとへ送られたとき、アダムはその名をイヴと名づけた。「それは、イヴはすべての生けるものの母なればなり。」(モーセ4:26) イヴは最初の母であった。アダムとイヴは人類の先祖となった。以来この世に生を受けた子供たちは皆、この夫婦の子孫である。

さて、この男女は永遠に結び固められた。神ご自身が結び固めをされたのである。神はアダムにその妻イヴを授けた。神は、すべての人々がふさわしい生活をして、この世においても永遠にわたっても続くこの結婚の儀式にあずかるよう教えられた。主はまた、日の光栄の王国における3種の天界、すなわち3種の階級のうち、最も高いところへ行くために次のような条件をつけられた。「人はこの神

主の計画はすべて、愛と相互依存の精神で子供たちを世に送り出すことができるよう、入念かつ慎重に考慮されたのである。もし今日〔の〕……浅薄な考え方だけで天地創造が行なわれたとしたら、世界も人類も……とうの昔に終局を迎えていたことであろう。

権の位(すなわち新しく且つ永遠の結婚誓約を言う)に入らざるべからず。

人もし然せずんばそれを得ることを得ず。」(教義と聖約131:2-3)

これが正しい方法である。

自分の意志で結婚しようとしぬ男性もいる。このような人たちはみずから祝福を拒んでいるのである。また同じようにみずから祝福を拒んでいる女性も数多くいるようである。また機会がないために結婚していない人々もいる。もちろん私たちは、主が幅広く道を備えてくださっていること、また自分ではどうすることもできない事情のために罪の宣告を受ける人がひとりもないことを承知している。これは主の計画だからである。

結婚と男女の役割に関して、神に反抗したり、その神聖な計画を無視したりする人がいないようにしようではないか。

「すなわち、聖書に、『わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしものにする』と書いてある。

知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。」(Iコリント1:19-20)

なぜ神の計画を批判する人々がいるのだろうか。そのような人々はなぜ、人生における彼らの役割を引き受けて、それに感謝することができないのであろうか。

最近、ある地方紙に、勇気ある女性の次のような記事が掲載された。

「聖典では、男性の生涯を通しての最大の責任は、その妻と子供たちにとって導き手となり、守り手となり、扶養者となることである、と言っています。初めに神が男と女とを創造されたとき、神は女にこう言われました。『あなたは夫を慕い、彼はあなたを治める〔管理する〕という言葉の方が好きです』であらう。」(創

世3:16)使徒パウロもこれを再確認して、次のように言っています。『キリストが教会のかしら……であられるように、夫は妻のかしらである。』(エペソ5:23)」

彼女は神の計画を変えてしまうような、いわゆる知識人についても述べている。

神は人類の家族を組織されたとき、ご自分が何を目的としておられるのか、よく知っておられた。この女性も、それを信じている人のひとりと思われる。

私は末日聖徒が皆、老若男女を問わず、生命の水を心ゆくまで飲み、そして主のゆだねられた美しくまたわかりやすい責任を果たせるような生活を送ってくださるよう、心から希望している。

すでに完璧な計画に口を差しはさむことなく、心を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして、与えられた広大な計画に添ってみずからを完き者とする努力を重ねるよう望んでいる。一部の人が失敗したからといって、その責任を計画のせいにするのは、はなはだ不当なことである。私たちの態度を、行動を、そして全生活をよく整えて、私たちに約束されている豊かな、また数限りない祝福を受け継ぐのではないか。

この大いなる神聖な人生というドラマの中で、私たちは神から与えられた何と大切な責任を果たせることであらうか。また、何と満たされた生活を送れることであらうか。何と美しい家族を育て、養うことができるであらうか。また、私たちの将来は、何と輝かしいものであろうか。

神は生きておられる。私はそれを知っている。イエスはキリストである。私はそれを知っている。そして、これは主の計画である。私はこのことを知っている。

それは皆さんの時代です

十二使徒定員会会員 ニール・A・マックスウェル

もっと別の時代に生きていればという思いは、わからないでもありませんが、常に有益とは限りません。モルモン経の時代のある人が、「その時私がもしも生きていたならば、……喜びが心に満ちたことであろう」（ヒラマン7：8）と書いています。しかしこの指導者はやがて、ほかでもないその時代に働くということが、やがて来る私たちの時代に向けての特別な神の召しの一部であることを知るに至りました。

教会の若人たち、かくて神のみこころのとおり、今は皆さんの時代です。皆さんは予言が成就され、歴史の合する時代、特別に約束された時代、対照のきわだつ時代、^{みんと}安堵の恵みを受ける時代に生きる人たちです。

前途洋々たる世代の皆さんは、思うに、「その後ほかの時代が起つたが、これは主を知らず、また主がイスラエルのために行われたわざをも知らなかった」（士師2：10）という、昔のあの青年男女の轍は踏まないことでしょ。

また、「すでに成年に達して独立するようになってから、あるゾーラム人たちの偽りと甘い言葉にさそわれて」（IIIニーフアイ1：29）道を迷ったとある、かの時代の青年たちの悲しい結果を味わうことはないでしょう。

とはいえ、皆さんの友人の中には、同じ教えを受けながら、「その神である主を全く忘れて」（アルマ47：36）道はずれ、反対者となってしまう人もいますことでしょう。

私は18歳の若さで、高校卒業とほぼ同

時に、手まわり品の中にしみだらけになった自分の祝福文を持って、第二次世界大戦に出征しました。沖縄諸島での戦闘中、年少歩兵の私は慰めと平安を求めてその祝福文を読みました。その前の高校時代、私は自尊心を危うくする危機を数回経験していたのです。飼育クラブの活動で豚を育てても、そうしたことは社交性を養ってくれず、ひどいニキビ面のため、人前に出るのがおっくうになり、また、背丈が高くなかったので、ことにバスケットボールチームにはまったく無縁な私でした。それやこれやで、徴兵される直前は失意に打ちのめされた状態でした。

ところが、愛する「善い父母」のいる家をあとにしたとき、私は自分が何者であるかを知り、将来の見通しを得たのでした。主が自分を愛しておられることも知りました。そうでなければ、不安と恐れは去らなかつたはずでした。

私は未来ある末日聖徒の新世代に、シャデラク、メシャク、アベデネゴの3人の若者に見る特性を持った、霊的にはるかに進んだ人々を見、心に感銘を覚えます。この3人の弟子たちはネブカデネザル王に屈して金の像を拝むことを拒否しました。火あぶりにされることを知ったとき、彼らは歴史にもすぐれてまれな返答をしたのでした。主に対する無条件の信仰と信頼が彼らを救うかどうか、それは問題ではありませんでした。

「もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができ

ます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。

たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません。」（ダニエル3：17-18）

皆さんが燃える炉の中に入るとき、主は共におられます。そのような経験はいつか訪れます。ペテロがこう告げているように。

「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起つたかのように驚きあやしむことなく……。」

（Iペテロ4：12）

この世代の皆さんに対する助言を、述べさせていだきたいと思えます。

1. 反射的な正しい対応を身につけること。それによって目先を変えてやって来る一つ一つの誘惑から逃れることができます。誘惑のたびに思い悩まなければならないとしたら、時間の浪費であるばかりか、霊性まで失うことになりかねません。

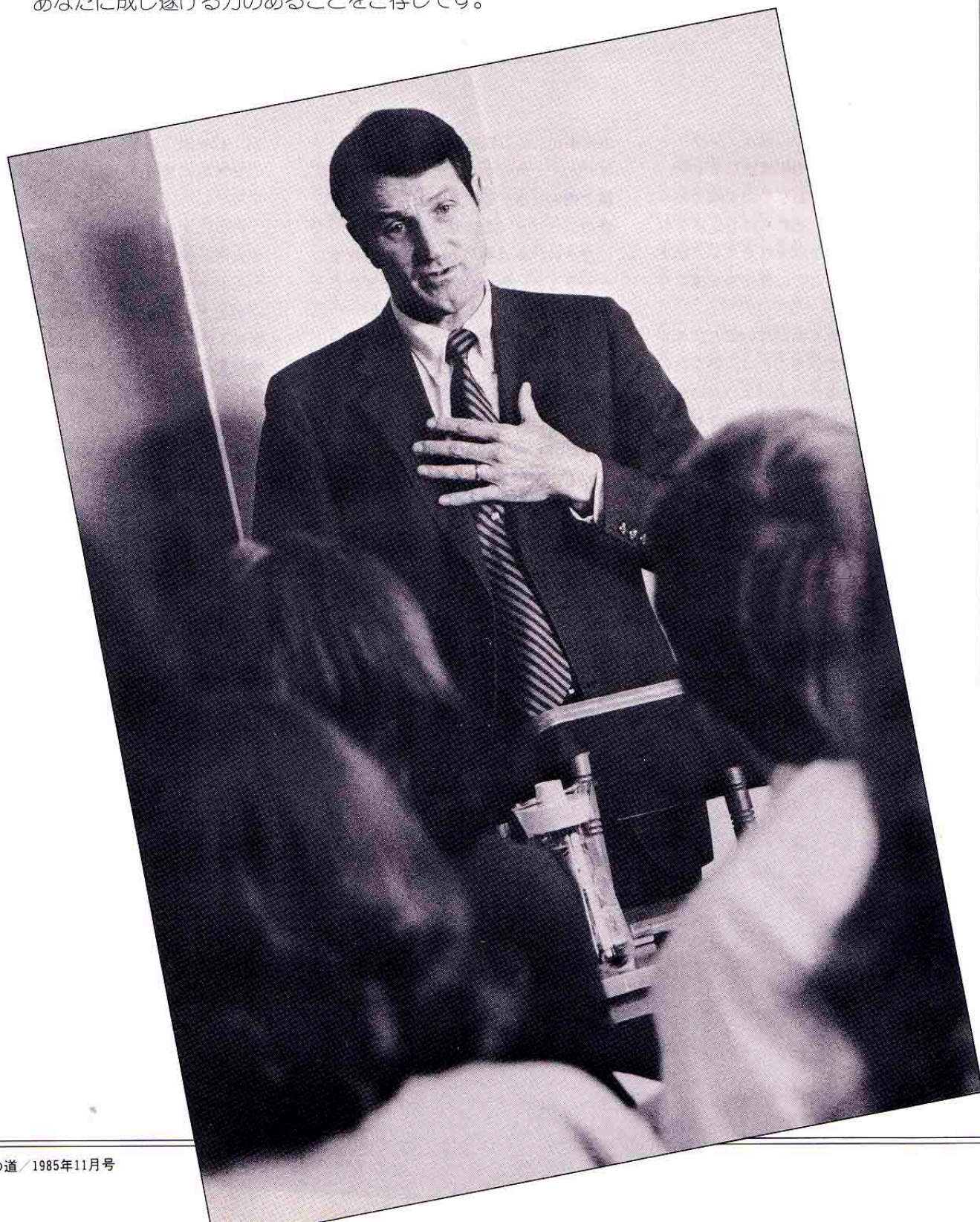
2. 喜びと快樂との違いを知ること。たとえば、この世的な享楽に迷わされないでください。その笑いはから元気のむなしい叫びでしかありません。

3. 信仰を守ること。そうすれば信仰があなたを守ってくれます。

4. 健全な趣味や娯楽を持つこと。娯楽を生活に取り入れることについては真剣に考えてください。

5. 世にあって優れた存在となれるように、世とは違った人であってください。

輝ける明るい未来を見つめてください。
あなたは神の約束により、
この時代と環境に生まれてきたのです。
神はあなたを知っておられ、
あなたに成し遂げる力のあることをご存じです。



皆さんの時代は
地から平和の取り去られる時代です。
しかしあなたは
心と家庭に主の平安を持つことができます。

6. 薬物、アルコール、ポルノグラフィ
ーや本来の姿に反する不道徳なことを、
自分の自由と幸福をおびやかす敵である
と考えてください。それらは心と体をむ
しばみ、霊の味覚を麻痺させます。感覚
を間違っまちがって喜ばすことは感受性を損なう
のです。

7. 気分で信念を曲げないこと。モル
モン経に書かれていることは、あなたの
つき合いメモに書かれていようがいまい
が、確かなことまことに変わりはありません。

8. 今は若くとも、時計は休まず時を
刻みます。年を取るにつれ、週は日のよ
うに、月は週のように、1年はひと月の
ように感じられます。そしていつしか、
ヤコブのようにこうつぶやくことでしょ
う。「一生の過ぎるのはあたかも一場の夢
のようである。」(モルモン経ヤコブ7：
26) 物事に喜んで、夢中に取り組んでい
ればなおのこと、時はあうと言う間に過
ぎていきます。「ヤコブは7年の間ラケル
のために働いたが、彼女を愛したので、
ただ数日のように思われた」(創世29：
20) とあるように。

9. イエスが生きておられること、こ
の教会はイエス・キリストの教会である
こと、福音が真実であることを、あなた
も自分で知ることができます。しかしそ
のためための方法はただひとつ、近道もエス
カレーターエスカレーターもありません。「神のみこころ
を行おうと思ふ者であれば、だれでも、
わたしの語っているこの教が神からのもの
か、それとも、わたし自身から出たもの
か、わかるであろう。」(ヨハネ7：17)

10. 自分自身や自分のまわりに起きる

出来事が、みな説明のつくものとは限り
ません。それだからこそ、天父に深い信
頼と信仰を寄せることが必要なのです。
昔のニーファイの言葉をあなたも語って
ください。「私は神がその子供たちを愛し
たもうことは知っているがよろずのこ
との意味を知っているわけではない……。」

(I ニーファイ11：17) 私たちが折々に
知ることのできるのはこのことだけで
す。でも、それで十分です。

皆さんは神に召され、この時代、この
環境に置かれています。神は皆さん自身
よりもよく皆さんを知っておられ、皆
さんの能力が何であるかもご存じです。し
かしながら、皆さんが現在いかにすばら
しかろうとも、将来も今のままであつた
としたら神はそれに満足されないでしょ
う。神は、皆さんにどのような力がある
かを知っておられるからです。

前途には様々なチャレンジがあること
でしょう。皆さんの時代はノアの時代のよ
うになるでしょう。(マタイ24：37-42参
照) しかし同時にそれは、教会が発展し、
教会員が地の全面に散らばる時代でもあ
るのです。(I ニーファイ4：14参照)

教会のステーク部も、神殿も、次々に
建設されます。

確かに、皆さんの時代は地から平和の
取り去られる時代です。(教義と聖約1：
35参照) しかし皆さんは心や家庭に主の
平安を持つことができ、その平安は人知
を越えています。(ヨハネ14：27；ピリビ
4：7参照)

確かにこの時代は、不法がはびこって
多くの人の愛が冷えるでしょう。(マタイ

24：12参照) しかし、それでも皆さんは、
心と家庭に愛を持ち続けることができる
のです。

そうです。悪い行ないのせいで、大勢
が人間社会の状況に絶望する時代です。

(モロナイ10：22参照) しかしあなたは、
「義と大きな栄光にかがやく神の能力と
を以て武装」(I ニーファイ14：14)する
神の民のひとりです。主はその民のただ
中におられます。民を導き、あなたを導
かれます。

「汝らいますべての事に堪うる能わず、
さりながら心安かれ。われ汝らを導きて
行けばなり。王国は汝らのものなり。そ
れに属ける祝福も汝らのものなり。また、
永遠の富も汝らのものなり。」(教義と聖
約78：18)

「また大いなる艱難人の子らの中にあ
らんも、われはわが民を護るべし。」(モ
ーセ7：61)

確かにこの時代は、多くの人が聖典を
無視する時代です。(モーセ1：41参照)
しかしあなたは、古代、近代の聖典が合
して広まるさまを、特に聖典を用いるこ
とを知ったときに、見ることでしょ
う。

皆さんの時代は、イエスを「つまらぬ
者」(I ニーファイ19：9)と考える人が
いよいよ増える時代です。イエスを「あ
たりまえの人」(モーサヤ3：9)と見る
人々はあるでしょうが、あなたはイエス
を自分の飼い主、自分の模範としていた
だくことができます。主からあなたへの
戒めは、「われと同じ人物」(III ニーファ
イ27：27)になることなのです。

怒りの

石

ラリー・ヒラー

マ ルコム・テントがポケットに石を入れ始めたのは、まだ若い頃でした。上司のミスター・ガンプが見当違いのことで彼を怒った日に、それが始まったのです。首を切られるのが恐ろしくてどなり返すことができず、できることと言えば、胸に怒りを燃やす以外になかったのです。「だがな、ぼくは絶対忘れないぞ。何があったって。」そう思いました。

その晩、バス停からの帰り道でマルコム君は考えます。「この煮えくりかえる胸の内は何としても忘れちゃならんぞ。朝になっても覚えておかななくては。」そこへ

いいアイデアが浮かびました。目の前の歩道に小石が1個落ちています。彼はそれを拾い、しめたとばかりにつぶやきました。「この石をポケットに入れて、見るたびにミスター・ガンプの仕打ちを思い出すことにしよう。」

マルコム君はそれを実行しました。その夜、鍵束やくしと一緒に、石もたんすにしまったのです。翌朝、身仕度をして仕事に出かけるとき、きたない灰色の石はちゃんとポケットに入っていました。

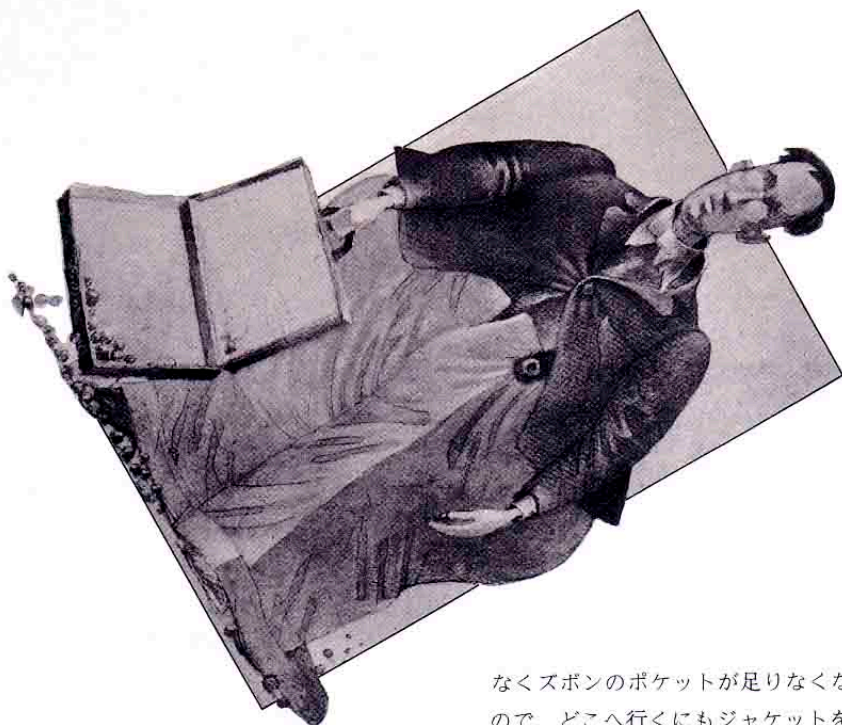
その日も次の日も、ポケットの重たいふくらみはミスター・ガンプへの怒りを思い出させてくれました。ミスター・ガンプはあの事件をきれいさっぱり忘れてしまっているようです。しかし、マルコム・テントは違います。忘れるなどとはとんでもない。あれからの2週間に、ミスター・ガンプはまた何回もマルコム君を怒らせて、忘れまいぞとマルコム君は、怒るたびにひとつずつ石を拾うことにしたのです。

だから、マルコム・テントのズボンにはボコボコふくらんでおかしな格好になりました。しかしともかくも、ミスター・ガンプを許すまい、いい顔なんぞしてや



るかど、決意を新たにできるのです。

もしも、怒ったときの石集めがミスター・ガンブに向けられただけだったら、これもいつかは立ち消えになったでしょう。ところが、ある雨の日に、すぐ横を通りかかったタクシー運転手が、そのままマルコム君には目もくれず彼を立ちんぼにしたまま走り去ったのです。溝の中からぬれてすべすべした小石が拾われて、マルコム君のポケットに入りました。(運転手の名前など、もちろんわかりません。しかしそんなことはどうでもいいのです) それから、おつりをくすねたスーパーのレジ係がいて、水たまりの中に新聞を投げ込んだ新聞配達の少年がいて、隣の家の飼^い犬は真夜中にやかましく吠^いえただてます。マルコム君は、世間には自分を悩ますものがうようよいるものだと思



いました。

そうこうしているうちに、マルコム君は、全部のポケットが石で一杯になったらズボンがベルトで支え切れないことに気づいたのです。(両腕一杯にスーパーの紙袋を抱えていたときにそのことに気がつきました) そこで彼は、頑丈な皮製のズボン吊りを作りました。ところが間も

なくズボンのポケットが足りなくなかったので、どこへ行くにもジャケットを着る羽目になりました。たくさんポケットのついたジャケットです。でもそれも、ズボン同様じきに不恰好になりました。ほこりっほいにおいまでしてきました。ポケットが多かったので、重さがこたえます。

ほかの人だったらここであきらめもしたでしょうが、マルコム君は違います。彼はセールスマンが使うような大型のしっかりしたブリーフケースを買いました。とにかく、捜そうと思ってみれば、気にさわることなどいくらだってあるのです。たくさん石を持ち運んでいつも疲れていれば、それだけいっそう怒りっぽくもなります。

歳月が過ぎ、マルコム君の石のコレクションはポケットやブリーフケースをはみ出して、家中に散らばりました。台所の流しやたんすの中やあちこちの床の上が石だらけです。夜中も忘れまいとして、ベッドの中に石を持ち込んだことが何回もありました。そうだぞ、忘れまいぞ。マルコム君はすでに偏屈な変人になって



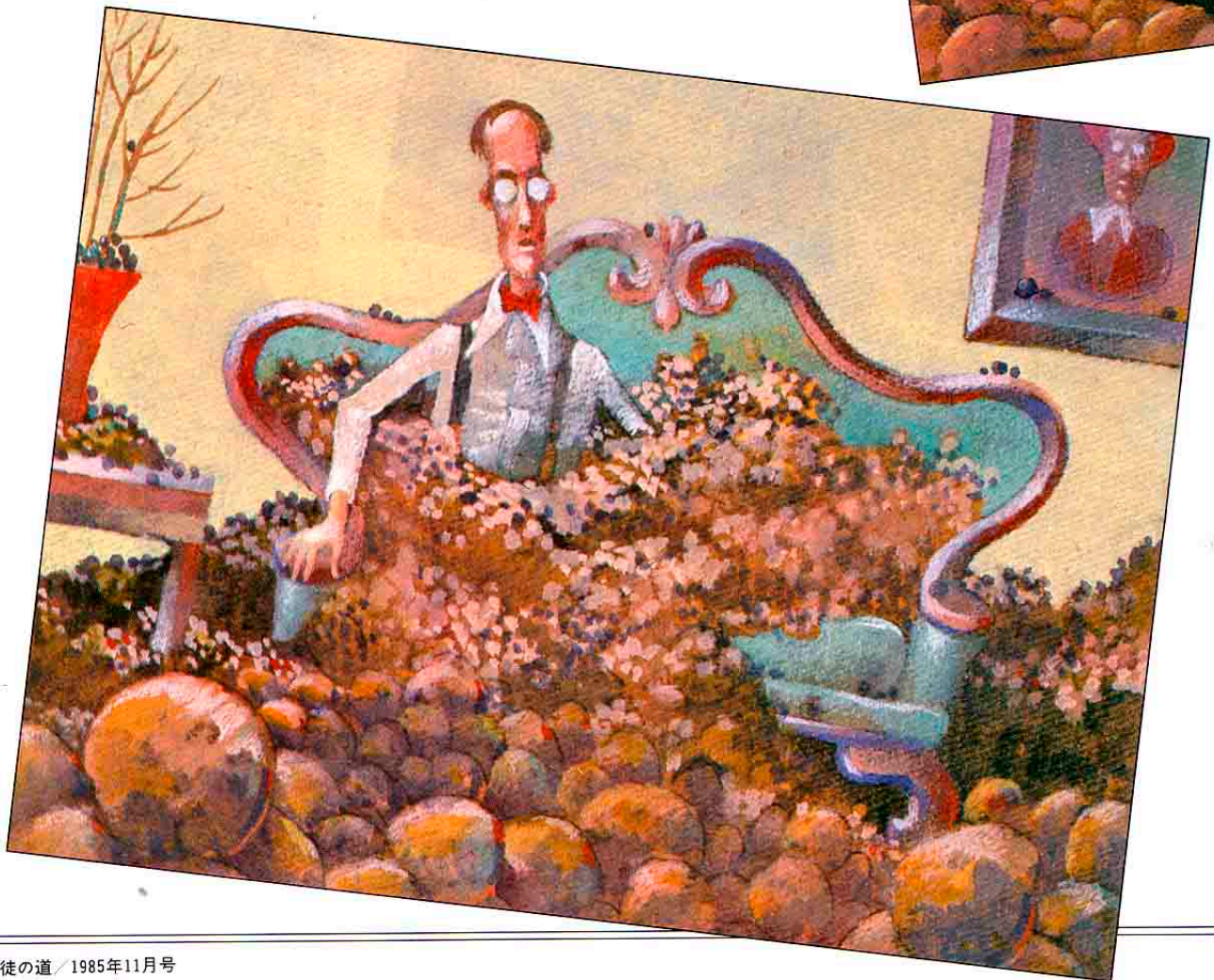
いました。ほとんどの人が極力彼を避けるので、それですます怒りっぽくなりました。石はたいして良いお仲間ではありません。硬いし、ほこりっぽいし、冬にはひどく冷たいものです。

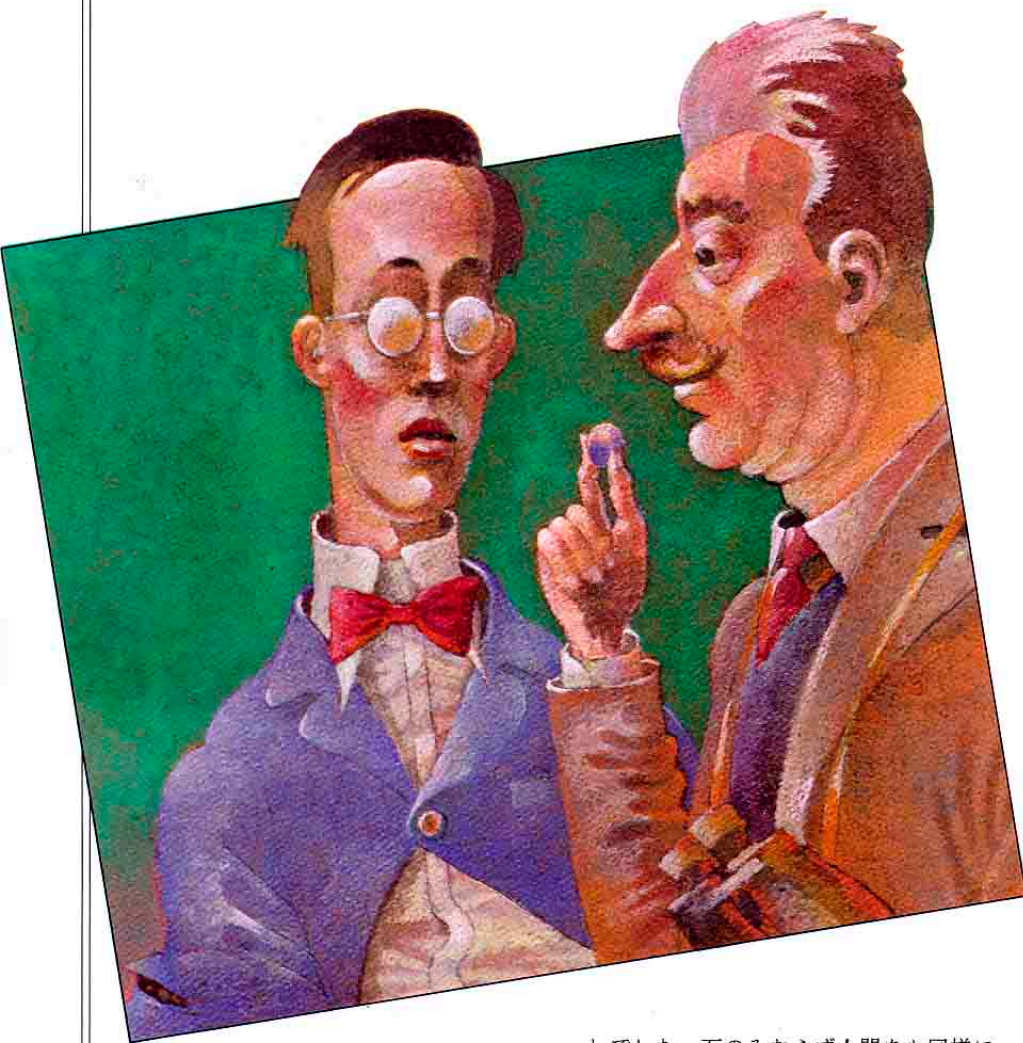
さて、マルコム君はこのまま石の中に埋もれて、意固地な老人になっていったかもしれません。ある日のこと、大学の地質学研究所から彼に電話がありました。イグニース教授はマルコム君の石の大コレクションのことを耳にして（聞かない

人などいるでしょうか）、自分の生徒たちに見学させたいと言うのです。

マルコム君は考えました。「それ、私の石の真価を知るものがついにひとり出たぞ。人が私をどれだけ傷つけたか、記念の石の山を見てもらうのだ。」次の土曜日に来訪が決まり、それまでの幾晩か、マルコム君はほこりにまみれて石を整理しました。

ついに土曜日がやって来ました。2時に玄関の呼び鈴が鳴りました。玄関には、イグニース教授と優秀な7人の学生が





ンクリートの破片まであるではありませんか。

ようやくイグニース教授が口を開きました。「ゴホン。」せきばらいをひとつして、「いや、テントさん。コレクションのご説明をありがたくうけたまわりたいと存じます。正直申しまして、このようなコレクションには、私たちが初めてお目にかかったものでして。」後ろに並んだ学生たちは、そうだそうだと相づちを打ちました。

「ええと。」マルコム君はどきどきし始めました。「私は、ああ、あの……つまりその……」だれかに何かをじっくり話すということは、ずいぶん久しぶりなので

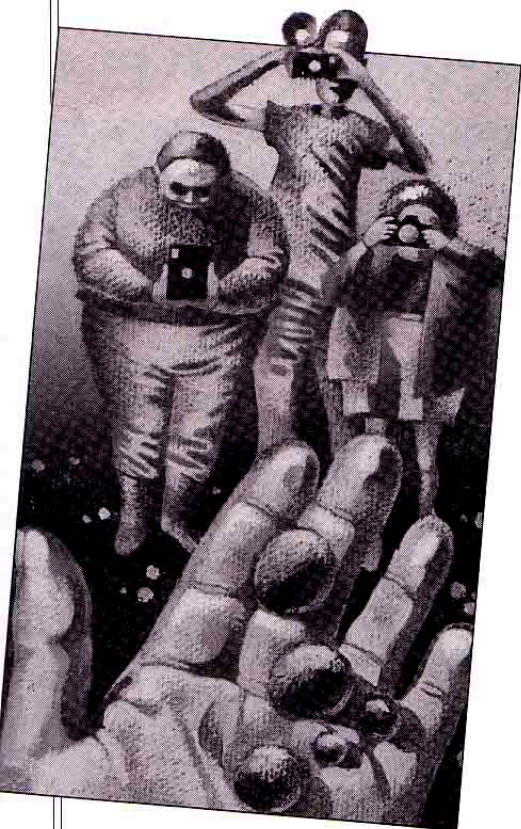
立っていました。みんなそれ用の立派ないでたちです。ベルトに石叩きのハンマーをぶら下げた学生たちがいて、カメラを持った学生もひとりふたりいました。全員がノートと鉛筆を手にしていました。

イグニース教授自身はむしろ質素に見えました。にこやかな笑みをたたえ、長年野外で働いてきたせいで、顔が黒く日焼けしています。目にもただならぬものが感じられました。濃い色の深い瞳に、いかにも人生を楽しんでいる輝きがありました。人を見るにも、山や岩石を見るのと同じ、内部を見すえるようなまなざ

しでした。石のみならず人間をも同様に愛する科学者がそこにいました。

教授と学生が石で埋もれた居間に足を踏み入れたとき、マルコム君はおおっという感嘆の声を期待しました。花火大会で聞くあの歓声です。ところがそうではなく、薄気味の悪い沈黙が続きました。教授たちはただ黙って突っ立って、あたりを見まわし、ときたま石ころを足先で転がすだけでした。学生たちが、何かを促すような表情で教授を見ました。これは期待していたような美しい石や鉱物のコレクションではなかったのです。ありきたりの石灰岩や砂岩や石英岩のかけらばかりです。何と、アスファルトやコ





した。

イグニアス教授にはマルコム君のあがりようがよくわかりました。かわいそうなマルコム君が口ごもり、つまるたびに、のどぼとけがヒクヒク上下します。(石のみ込もうとしていると思った学生が何人かいました)

教授が助け舟を出しました。「まず、こういう石を選んだきっかけをお話くだされば」と言いながら、中でも一番ありふれた灰色の石のひとつを拾い上げました。「この石灰岩をコレクションに選ばれたわけは、どんなことでしょうか。」

「ああ、それはそういう石なんですか。ええと、それは洗濯屋が期日までにシャツを洗っていなかったときに拾った石だと思います。いや、待てよ。違います。

楽しみにしていたテレビが中止になったときです。いや、もしかしたら、電話が鳴っていたんで大急ぎで走って帰ったら間違い電話だったときのことかもしれません。どうかな……それとも」と、しばし記憶をたどるマルコム君。石は大変な数なのです。それにどれも似ています。灰色で硬くて冷たくてほこりっぽくて。突如マルコム君は気づきました。そんなことはイグニアス教授も学生たちも見ればわかることで、他人にはどれもありきたりのつまらない石ころなのです。真価をわからせるために、マルコム君の説明が必要です。

「これらの石は、見た目以上に大事なものです。一つ一つが、私自身が傷つけられたり、不快にされたり、怒らされたりしたときの記念なのです。忘れないようにそのときひとつずつ拾い集めた石です。」

それを聞いた教授や学生たちは、目を丸くして驚きました。いっせいに口を開いてしゃべり出しました。「こんなこと、生まれて初めて聞いたよ。」「どれくらい、こうしたことを続けておられるのですか。」「石の山とあなたを写真に撮らせてください。」「これはまあ、何たる実地研修！」

イグニアス教授がまた話を始め、皆は黙りました。「ええと、テントさん……。」「おもむろに口を開きます。「実は、そうした動機で石の収集をやっておられる方には、初めてお目にかかったわけです。」「ここでひと息ついて、まわりを見わたしました。「我々をお招きくださり、ご好意を感謝いたします。お時間を取らせて申し訳ありませんが、ここにおじゃまいたし

ましたせっかくの機会に、もっと別のコレクションを見せていただけませんかでしょうか。」

マルコム君の顔に当惑の表情が浮かびました。「ほかのコレクションなど、ないので……。」「

「ああ、さようですか。私はまた、人からしてもらった良いことのコレクションも集めておいでかもしれないと思ったものですから。いや、結構です。お気になさらないでください。では、そろそろおいとましますと。お呼びくださって本当にありがとうございました。学生た



ちも大事なことを勉強したろうと思
います。」

教授は学生たちをまわりに集め、玄関
へ向かいました。それからもう一度、マル
コム君を振り返って言いました。「午後
に少し時間があるのです。よろしければ、
似たようなコレクションをしているほか
の方のところへご案内していただけませ
んか。」

マルコム君はまたもや答えに詰まりま
した。「私と同じようなコレクションな
ど、聞いたことはありませんが。」

「そうですか。いや、ご存じのどなた
かが、あなたから不快な思いを受けられ
たときの記念品を集めておいでかもしれ
ないと思ったものですから。」そしてすぐ
続けて、「よろしいんです。では、ごきげ
んよう。ありがとうございました。」

教授と学生たちは、そそくさと歩道を
遠ざかって行きました。

彼らが立ち去ってから、マルコム君は
自分の集めた石のように、冷え冷えとし
て顔を曇らせ、身じろぎもしないまま長
い間そこに突っ立っていました。胸には
教授の言葉がこだましていました。家中
が静まりかえっています。あまりに静か
です。そのとき、学生たちの人なつこい
おしゃべりの楽しさが突然よみがえっ
てきました。人と親しく語り合うなど、何
年ぶりのことだったでしょう。そう言え
ば、今彼に友達はいるのでしょうか。

それに続いて次の思いが浮かんできま
した。「この石は私そのものじゃないだろ
うか……。」マルコム君は暗がりの中にひ
とり座っているうちに、石はつまらない
仲間だということにようやく気づきまし
た。そして自分もつまらないのだと。そ
うです。実際口に出して言わなければ、

思いつくのさえずるかしい考えというも
のもあるのです。

何日もの間、座り込めば何時間も石の
ようにじっと座り、マルコム君は石頭を
ひねって考えました。彼の頭はもうコチ
ンコチンでどうしようもないと思う人が
いるかもしれません。ところが、心の奥
深くで、何かが目を覚まして育ち始めた
のです。春の土にまかれたひと粒の種
のように。

ありきたりの汚ない石の引き取り手を
探すことは、子猫のもらい手を探すこと
と同じくらい大変なことです。マルコム
君は掃除婦を雇いましたが、彼女たちは
口をそろえて言いました。「窓は磨きませ
んよ。石は拾いませんよ！」窓に「石、
無料で差しあげます」という看板を掲げ
ても効果がありませんでした。とうとう
マルコム君は、自分で腰を上げなければ

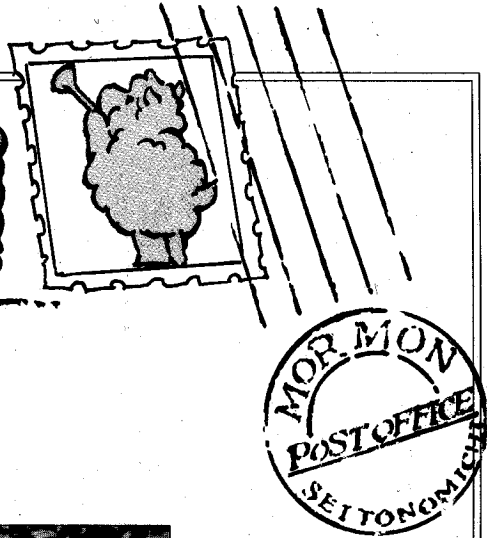
ならないと悟りました。

隣近所の人たちは、マルコム君がトレ
イラーを借りてきて正面玄関に横づけし
たことや、シャベルで石をトレーラーに
積み込んだときのもうもうと上がった土
煙のことを、今も語り草にしています。
このごろは、マルコム君がはつらつとし
ていること、服がびしっと決まっているこ
と(体重が減ったのでしょうか)、笑顔が
見られることも、話題にのぼります。

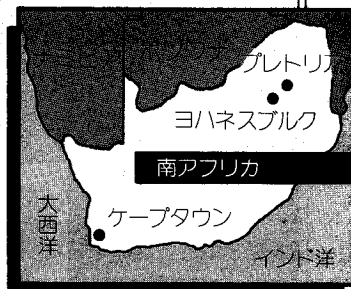
隣人たちは、木や草花が所せましと植
えられたマルコム君の美しい庭を自慢し
ます。彼が急に庭仕事に興味を持ち始め
たわけを、だれも聞いていません。ただ
以前にクラッツ夫人が、ひと切れのケ
ーキを持って行ってあげたあとで、マル
コム君が花壇に出て、ひと粒の種をまい
ていた姿を見かけたということです。



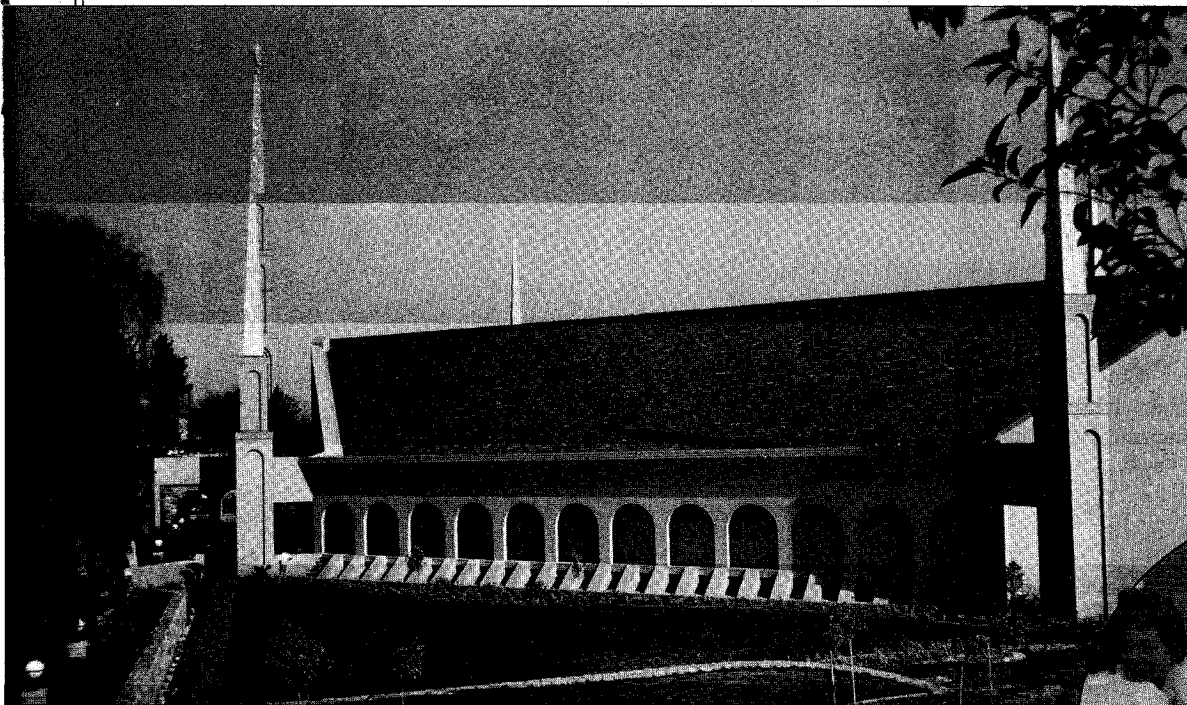
各地のたより



南アフリカに輝く宝石—— ヨハネスブルク神殿献堂さる



- 南アフリカ・ヨハネスブルク神殿
- (下)神殿の献堂を喜び合う教会員



去る8月24-25日、南アフリカ・ヨハネスブルク神殿が献堂された。ヨハネスブルク神殿は、ダイヤモンドと金の鉱山として有名な地において、最も新しく、しかも美しい輝きを放つ宝石であると言える。

ヨハネスブルク神殿はアフリカ大陸に建設された最初の神殿で、これにより南極大陸を除く全大陸に神殿が存在することになる。また同神殿は現在儀式が執行されている神殿としては36番目のもので、教会本部からは一番遠くに存在する。

献堂式には、南アフリカの教会員数(12,000人)の4分の1を少し上回る、約3,480人が8月24日土曜の2回、翌25日の2回の計4回の献堂式のセッションに出席した。定礎式は日曜日の朝、献堂式の前に行なわれた。出席者には近隣のジ

ンバブエ、レソト王国、スワジランド、ボツワナ各国の会員もいた。この神殿は、ガーナ・アクラ伝道部、ニカラグア・ラゴス伝道部の会員にも供されることになる。

南アフリカは人種のるつぼとなっており、言語もヨーロッパ諸語が混ざったものからアフリカ現地の言葉まで多数にわたり、人々は英語を含む2カ国語以上を話す。また居住地区も人種によって別れているが、献堂式に出席するため1.5エーカーの広さの場所に集まった人々は、白人、黒人、混血の区別なく民族や言語の壁を越えて並び、神殿内でも同席したか何の混乱も生じなかった。

ゴードン・B・ヒンクレー第二副管長はこのような光景を見て、24日の献堂の祈りに先がけて次のように言った。「皆さん

を外形的に区別することはできません。でも、主の宮居にいるときは皆同じです。……この国に神殿ができたことには大きな意義があります。『見よ、イスラエルを守る者は、まどろむこともなく、眠ることもない』(詩篇121:4)とあるように……神はこの地を見守ってくださるでしょう。』

ヨハネスブルク神殿の献堂式に列席した教会幹部は、ゴードン・B・ヒンクレー第二副管長、十二使徒定員会会員の二

各地のたより

ール・A・マックスウェル長老、七十人第一定員会会員のジョセフ・B・ワースリン長老、ロバート・L・バックマン長老、ラッセル・C・テイラー長老、J・リチャード・クラーク長老である。

初代神殿長として召されたハーラン・W・クラーク神殿長は、1935-37年に宣

教師として、1970-73年に伝道部長として南アフリカの地で伝道の業を進めた。

南アフリカの教会員は、神殿の建築を予言の成就と考えている。しかしその陰には、長年の間惜しむことなく多額の献金を行なった会員の犠牲がある。自分の自転車を売って献金に充てた少年もふた

りいた。そのようにして自国に建築された神殿について、ある改宗者は、「この祝福のためには何でも喜んでするつもりです」と話している。今や神殿の儀式と誓約を通して与えられるすべての祝福が、アフリカに住む教会員にも広く及ぼうとしているのである。

2度目の来日を果たした モルモン・タバナクル合唱団

●東京の「新宿文化センター」で最終公演を行なう
モルモン・タバナクル合唱団



●大阪・名古屋地区からの レポート — 「音楽により一 層の広がりを感じられまし た」

350人の団員を擁するモルモン・タバナクル合唱団が1979年に引き続き6年ぶり2回目の来日を果たし、大阪、名古屋、東京、つくば科学技術博覧会、日本武道館での「24時間テレビ・愛は地球を救う」のチャリティー番組の出演と合計13回の公演をしました。

8月16日、夕日を受けて、団員を乗せた2機のチャーター機が大阪空港に舞い降りてきました。しかし、スタッフや同

行した家族を含めて500人を越す大所帯が通関手続きをするのには、かなりの時間がかかり、地域会長会のキース・W・ウィルコックス長老を始めとする出迎えの聖徒の前に彼らが現われたときは、もう夜の8時でした。拍手の中、合唱団のウェンデル・M・スムート会長、指揮者のジェラルド・D・オトリー兄弟などに花束が贈られ、「16時間の旅のあとで大阪で受けた歓待は、本当にうれしかったです」と団員のひとり話していました。

今回の公演旅行の皮切りは、翌17日午後3時の梅田のザ・シンフォニー・ホールでの公演です。輝く金管楽器、天にまで響くパイプオルガンの伴奏とともに、重厚な大合唱が会場に響きわたるのを息を

ひそめて聴き入りました。

6年前の合唱団は、男女が左右に分かれて整列していましたが、今回は写真に見るように市松模様の並び方です。これは「ミックスド・フォーメーション」と言って、音の配合を良くするため昨年から採用されたと聞きました。

また、6人の管・打楽器が伴奏に加わっていました。彼らにあとで聞いてみたところ、「我々はBYUの音楽の教員で作っている合奏団です。昨年夏のカナダと米国東部でのコンサート以来、合唱団の公演旅行に同行しています」と話してくれました。

このため、6年前に比べて音楽により一層の広がりを感じられました。

各地のたより

プログラムは、前半はクラシックや宗教音楽でした。司会者のJ・スペンサー・キナード兄弟が「スポークンワード」を始めると、舞台の袖でミキシングをしていた会場の職員が「きれいな声だ」と思わずつぶやきました。キナード兄弟の解説のあと、末日聖徒が愛してやまない讃美歌「恐れず来れ聖徒」が大きなスケールで歌われました。彼らの信仰の歴史の重みをずっしりと感じさせる演奏でした。

休憩をはさんで、後半は日本の歌やポップスターなど軽い内容になっています。豊中東ワード部の求道者の内本さん(17歳)が言うように、「終わりに近づくにつれて徐々に盛りあがってきた」ように感じました。アンコールの「76のトロンボーン」では手拍子まで飛び出しました。

高槻ワード部の中村聖(16歳)、武司(14歳)の両君は、「最後の『神よまた会うまで』」を感動して一緒に歌いました。是非、また聴きたいです。倉敷ワード部の片山妙子姉妹は、「毎週カーステレオでタバナクル合唱団のテープを聴きながら教会に行く」ほどのファンで、「大好きな『リパブリック讃歌』」がアンコールで出て、とてもうれしかった。朝8時40分に家を出てきた甲斐がありました」と話していました。

合唱団が今回の公演旅行のために用意してきた舞台衣裳は3着、曲目は32曲です。平常の木曜日と日曜日の練習に加えて、火曜日にも特別練習をして、準備して来てくれました。

60歳になるか、在席20年になると合唱団から退団することになっているそうで、「6年前にも来たのは、半数より少し多いくらい」とのことでした。初めて来日した団員に日本の印象を尋ねると、「人情豊かなお国ですね」と返事が返ってきました。

大阪ではその日の午後7時、19日(月)の午後7時(フェスティバルホール)と都合3回の公演がありました。

20日の朝早く、合唱団は12台のバスに分乗して名古屋に向かいました。名古屋のふたつのステークス部の会員——名東ワード部(名古屋ステークス部)と福德ワード部(名古屋西ステークス部)——は、昼食を



●名東ワード部のホールを会場に、合唱団員を迎えて昼食会が行なわれ、日本の教会員との交流がもたれた

取ってもらおうと、ホールに280人分のハンバーガーやサラダなどを並べ、日米の小旗を両手に持って出迎えました。食事に割くことのできた時間は、わずか30分足らずでしたが、用意した食物にも、踊りや琴の演奏などの出し物にも大喜びしていました。別れるときには、日本人を全員舞台上げて、ホールから英語で「神よまた会うまで」を歌って聴かせてくださいました。大きなアメリカ人が大勢入って狭く感じるホールが歌声で満ちあふれ、聴く者の心も歌う者の心も熱いもので一杯になりました。福德ワード部の高橋佳代子姉妹は、「こんなにすばらしい方々と同じ教を信じる兄弟姉妹であるとは、私たちはなんて幸せなんでしょう。」名東南ワード部の武田俱子姉妹は「彼らと親しく接する機会があった私たち名古屋地区の会員は、特に幸せ者ですね」と話していました。

名古屋でのコンサートは、その日の午後3時と7時に愛知文化講堂で開かれました。北陸地方部と三重地方部の会員も大挙して聴きに來られました。

「9時半に金沢支部に集合し、50名弱の人たちでマイクロバスや乗用車に分乗して、5時間かけてやって來ました」と語る金沢の会員たちは、「美しいハーモニーに」(表とし子姉妹)、「スケールの大きさに」(谷本公子姉妹)、「『神よまた会うまで』の靈性に」(滝沢悦子姉妹)、それぞれ感動していました。金沢で改宗して26年前に渡米したウォールベック・ヨシエ姉妹が、合唱団を背にソロで「さくら」を歌っている間、古い金沢の教会員はじっと目をつぶって聴き入っていました。

プログラムは、大阪とほぼ同じでしたが、いつも指揮者も合唱団も実に穏やかな顔をしておられるのが印象的でした。歌うことが、奉仕することが、自分の証を伝えることが本当に好きなのだと思います。比較的年配の方が多く、過密なスケジュールのために疲れていることは、ワード部で食べ切れずに残っていた昼食の量を見ればわかるのですが、なおかつあのように喜々として歌っておられる姿を見ていると、彼らの愛の大きさがよくわかります。

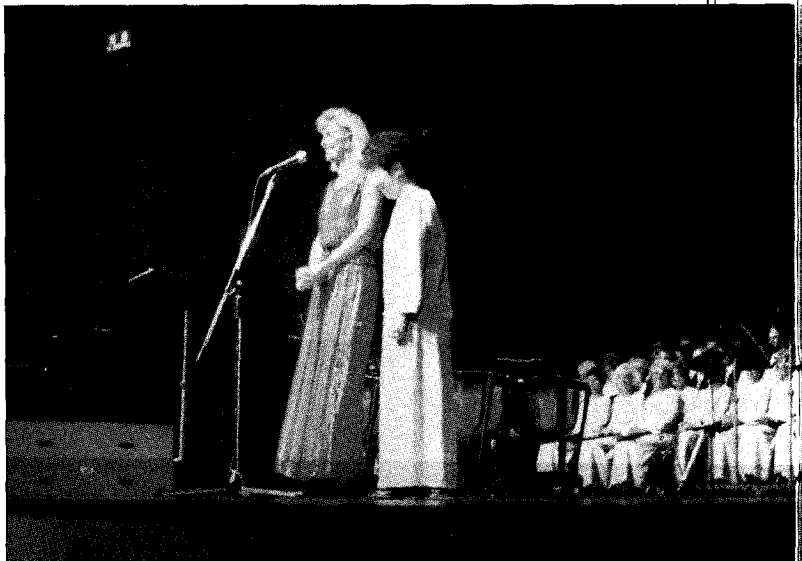
残暑厳しい折に、若い姉妹たちは頑張って振り袖姿で花束贈呈をし、文字どおり演奏会に花を添えました。

名古屋の中京テレビと、ソルトレーク・シティーのKSL放送局が姉妹局の関係にあり、それで今回の来日公演が実現したいきさつがあります。このため、中京テレビ主催のレセプションが夜9時半から都ホテルで開かれました。合唱団のスモート会長からはかもめの置き物が、中京テレビの石川社長からは美しい日本人形が相互に贈られました。石川社長は、「皆さんの歌声を通して心が通じ合い、国境を越えて真の交流ができます」と述べ、「どうか皆さん、今後も、何度でも来てください」と締めくくりました。会場からは大きな拍手が沸ぎました。

モルモン・タバナクル合唱団は、こうして私たちの心に彼らへの愛と歓びを残して、21日午前11時23分の新幹線で次の公演地である東京へと向かったのです。

(レポーター：名古屋ステークス部第二副ステークス部長・石川賢一)

各地のたより



●つくば科学万博会場の5,000人を収容できるエキスポプラザでタバナクル合唱団の公演に耳を傾ける聴衆

●8月21日の東京NHKホールでの公演には1985年度ミス・アメリカのシャーリーン・ウエルズ姉妹があいさつに立った

モルモン・タバナクル合唱団日本公演 同行記—感動に満ちた「よきおとずれ」

タバナクル実行委員 念垣 郷太郎

ギラギラと輝く太陽の真下で、ふと木陰に入り込み、一瞬、吹き過ぎる涼風を胸一杯に吸い込んだ爽快な気持ち—あのすばらしい感動に満ちた公演の数々を贈り物として、モルモン・タバナクル合唱団一行は8月28日(水)、13日間の長期コンサートツアーを終え、成田国際空港より帰国されました。

来演を心待ちにしていたときには「長く」、終わってみると、実に「短く」思われました。

モルモン・タバナクル合唱団の再来日公演は、音楽を愛する人々、また良い音楽を聴きたいと強く望んでいた人々にとって、まさに待ちこがれていた「よきおとずれ」でした。一行が来日した8月16日(金)は、早くから出迎えの人々が集まり、前回に引き続き主催された中京テレビの横山昭夫局長、笹崎景久事業部長ほか関係者、教会側よりアジア地域会長会のキース・W・ウィルコックス長老、また大阪地区担当の浜田博之大阪ステーキ部長、中村晴兆大阪北ステ

ーキ部長をはじめとして近郊地域の教会員および知友の方々、関係者を含め、約300人ほどになりました。

再来日の方、初めての方、皆口々に「美しい日本に來られた喜びでいっぱいです。……精いっぱい、期待に応えられるように最善を尽くします」と胸をときめかせ、何人もの方々がその喜びに涙しておられました。

来日公演の初日、8月17日(月)大阪シンフォニー・ホールでは、満場の期待を越えたすばらしく充実した演奏が繰り広げられました。正面中央に位置するパイプオルガンの荘厳な音律に包まれたハーモニーの重厚さに加えて、金管アンサンブルの輝かしく透明な響楽は、まさに天上の音楽の美しさにも思える壮麗さでした。続いて、バッハのカンタータを流麗に唱い上げ、織りなす4声部8パートの豊かな色彩のポリフォニーの美に整合する伴奏部、その器楽の鮮やかな音律がホールの隅々まで行き渡り、楽響の気高さに圧倒される聴衆を一瞬のうちに深遠

な音の泉の中に引き込んでしまったようでした。

感動的な宗教曲の数々を終え、休憩後の第2部は、あのフロンティアの源流を思わせる、楽しく、快活で、健康そのものといった「アメリカの古い歌」。それに日本の心で唱い上げた「赤とんぼ」は、美しく懐しい憧憬を見事に描きあげていました。「さくら」は日本の美を象徴する様々な要素が込められていますが、そのシンプルで美しい旋律を自在に変化させて、百花繚乱の内に峻厳な美の極みと、現世を越えて行く、永遠の時の広がりと尊さを感じさせる一篇でした。日本を深く理解した秀逸でした。

後半のミュージカルメドレーからは合唱団と聴衆とが一体となった、実に楽しいステージで、いずれの会場でも手拍子にあふれ、打ち溶けて、両者がまったく同化してしまった様子でした。

アメリカで「音楽とよきおとずれ」の番組を司会するJ・スペンサー・キナード兄弟の心深く語りかけるメッセージは、会場の人々の胸中に静かな喜びと勇気を与え、開拓者たちの苦難を乗り越えた歴史の重みと証をもって私たちに励まし、「恐れず来れ聖徒」と語りかけてくれました。

アンコールの数曲は、いずれもベストナンバーでしたが、「リパブリック讃歌」

各地のたより



- (左) つくば科学万博エキスポプラザで公演を行なうモルモン・タバナクル合唱団
- (上) 来日した合唱団の一行は1,000冊の贈呈用のモルモン経を用意し、各会場で配布した

はすばらしい迫力で、演奏が終わると「ブラボー！」の声があがり、立ちあがって拍手する人も多く、会場中が沸いていました。

東京地区では、NHKホール3日間4公演、つくば科学万博、武道館での24時間テレビ実況出演をはさんで、普門館、新宿文化センターまでの8公演で実に13日間13公演にもおよぶ大変な活躍ぶりでした。特に、8月24日(土)、つくば科学万博への出演は、「イベント中で出演者の数も聴衆の数も最大で、これだけ拍手が沸いたのもタバナクル合唱団が一番です」と主催者事務局を驚かせるものとなりました。

次に、24時間テレビ「愛は地球を救う」に出演です。朝8時半、東京のホテルよりバスでつくば科学万博会場へ。9時半より会場練習、11時から12時まで休憩なしの1時間の公演。その後小休止して午後2時発、バスで会場の武道館に直行です。そして4時から会場練習という日程ですから、まさに強行軍でした。

武道館では、当日司会役のひとりであるケント・デリカット兄弟が待ちかねていて、すぐステージでの練習がしたいとのことでした。「ウィ・アー・ザ・ワールド」の練習、暑い外気に加えて楽屋での

熱気、それに照明の温度も加わって、疲れと暑さで相当の悪コンディションの中、放送時間が迫ってきました。本番直前まで、体調を整えるには水が一番と、ステージ際でスタッフが汗だくで水を配りました。

司会のケント・デリカット兄弟の陽気でエネルギッシュな声に引き出されて本番が進み、出番となりました。出演者のアグネス・チャンさん、小泉今日子さんと、ディズニーの世界から踊り出たミッキーマウスたちや多くの若者たちの生き生きとした躍動感ある踊りを前に、タバナクル合唱団の清らかな愛に満ちた歌声が、雄大に会場いっぱい響きわたりました。——世界はみんなのもの——それは国を越え、人種の異なりもなく、貧しい人々のために、か弱い幼な子のために、愛を分かち合い、救いの手を握り合うための讃歌でした。

8月25日(日)には合唱団の投宿先のホテルオークラでレセプションが行なわれ、日本で活躍する合唱団関係者との交歓の場がもうけられました。

全日本合唱指揮者協会会長の佐々金治氏が来賓を代表して、「米国を代表するすばらしい合唱団の方々と、このように近くで歓談できる機会に恵まれて、お招き

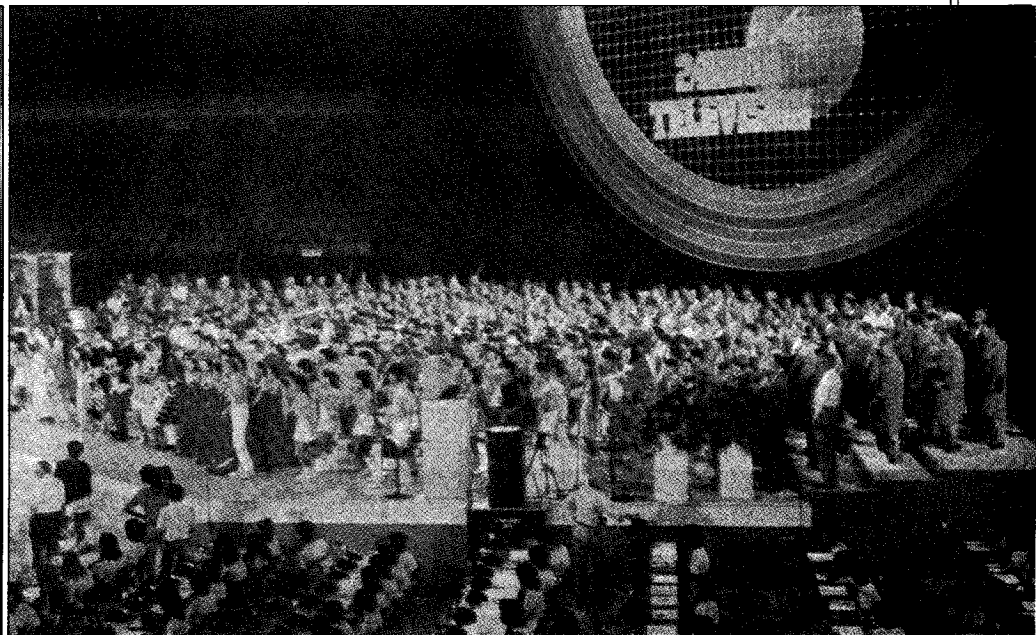
に心から感謝します。NHKホールでの公演を拝聴しましたが、300人以上の大合唱での圧倒するような迫力ある演奏に加えて、優れた発声法と演奏の技術もさることながら、人々の音楽を愛する心を深く感じました。日頃音楽を指導する者として、大切なこの心を、もっと中心に置いていかなければいけないと強く感じました」との挨拶がありました。また、タバナクル合唱団会長のウェンデル・M・スムート兄弟とアジア地域会長のウィリアム・R・ブラッドフォード長老より、「今回の日本公演とこのレセプションを機会に、音楽を愛する方々とのすばらしい日米交友の親善がより深められ、続けられるように期待しています」とありました。

軽食を取りながらなごやかなうちに行なわれた日米両国の交歓も、最後にタバナクル合唱団より来日記念として制作されたテープが日本の各合唱団員に贈呈され、会を終えました。

東京地区の公演についての感想が数多く寄せられていますので、そのいくつかをご紹介します。

『「聖徒の道」でタバナクル合唱団が来日することを知り、是非聴きたいと思っていました。念願の演奏会に来ることができ、ステージ上の合唱団と対面したと

各地のたより



● (左) 公演を無事に終えて喜びを共にするウォールバック・ヨシエ姉妹とオトリー夫人 ● (右) チャリティー・テレソン24時間テレビ「愛は地球を救う」(日本テレビ系放送)に出演中のモルモン・タバナクル合唱団(日本武道館で)

き、何か特別な神様の力を感じました。あれだけの人数にもかかわらず素晴らしい一致とハーモニーに、また謙虚で友好的な団員たちに心うれしい気持ちでした。ソロで歌った兄弟のあの素晴らしい表情を忘れることができません。」(旭川・I姉妹)

「私は64歳の主婦です。姪に誘われてこのコンサートに来ました。昔、勤めていた会社の合唱団に入っていました。発表会ではソロで歌った経験があります。今は昔のように声は出ませんが、またコーラスをやってみたいと思いました。女性コーラスがとても美しく、また歌われた曲もとても美しいものばかりでした。あのように素晴らしい合唱団の中で歌えると楽しいでしょうね。美しい歌声や団員のほほえみに合唱団一人一人の人格がうかがえるようでした。」(東京・Mさん)

「日本の人々への心配りがすばらしかった。霊的なコーラスありがとう。」(埼玉・Yさん)

「歌声も良かったが、それ以上に歌っている人たちの笑顔が心に残っている。」

(東京・Hさん、K氏)

「久しぶりで陶醉できるコーラスを聞かせていただきました。人数に頼りがちなコーラスが多い中で、実に素晴らしい

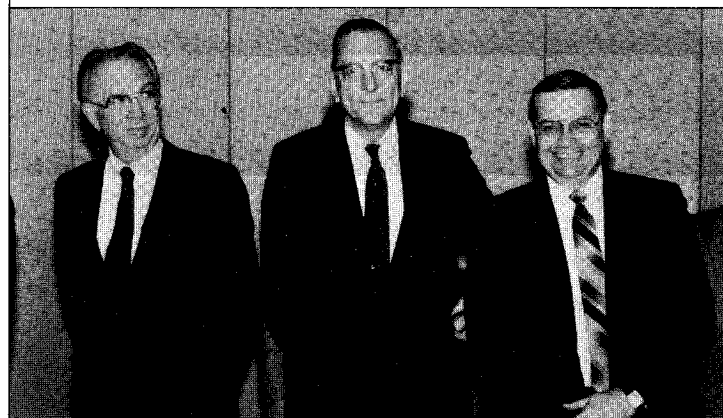
ハーモニーでした。特にピアノシモは絶妙でした。赤トンは日本の合唱団より気持ち(情景)が出ており、感服しました。多少コーラスをたしなむ小生強く反省させられました。」(東京・A氏)

「きょうは、私の息子が入院している聖マリアンナ医大の看護婦さんに誘われて妻と一緒に来ました。とても感動しました。特に『恐れず来れ聖徒』の曲には、勇気づけられた思いです。」(川崎市・A氏)

いずれの公演でもステージの合唱団員と会場の聴衆との間に、温かい心の交流が感

じられました。この公演のために尽力された主催者ならびにスタッフの方々には、多忙にもかかわらず、ご支援ご協力をいただきました。また、新聞、放送、音楽誌など報道関係の方々、音楽関係諸団体の方々に、心から感謝申しあげます。準備から終演まで約半年の間、終始励ましと見守りの中に全力投球していただきました地区代表の岡本亮長老、今井一男実行委員長をはじめとするタバナクル実行委員会および関係者の方々にも重ねて感謝申しあげます。(ねんがき・ごうたろう)

● 8月25日のレセプションに出席したアジア地域会長会
(左よりキース・W・ウィルコックス第二副会長、ジェイコブ・ディエガー第一副会長、ウイリアム・R・ブラッドフォード会長)

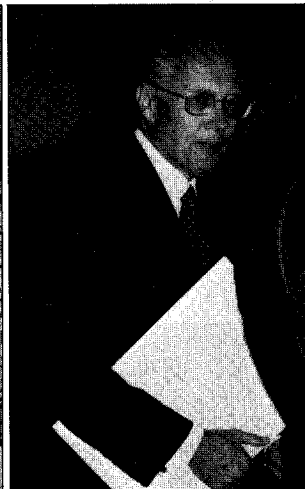


● 「音楽とよきおとずれ」の司会を担当するJ・スペンサー・キナード兄弟

各地のたより



● 8月25日、日本の合唱関係者を招いて行なわれたレセプション。中央は指揮者のオトリー兄弟（ホテルオークラで）



● オルガニストのロバート・カンディック兄弟



● 副指揮者ドナルド・H・リプリングー兄弟ご夫妻

母国日本での公演

—「最も霊的な経験のひとつとなりました」—

ウォールベック・ヨシエ

またひとつの公演旅行がタバナクル合唱団の歴史に加えられました。しかも、私にとってこれはただの公演旅行ではありません。母国日本での公演です。タバナクル合唱団を母国の方々に紹介できることに、どれほど大きな誇りを感じたことでしょうか。そしてそれ以上に、私の心はすばらしい日本人の方々にタバナクル合唱団員に紹介できる喜びでいっぱいでした。

音楽と笑顔には、言葉の壁を越えるものがあるようです。合唱団員の多くは、遠い日本の地でたくさんの方々と新しく友達になりました。全員が日本の聖徒の皆様のお愛を深く感じています。この公演の成功の陰には、教会員の皆様のおかげと伺っております。心よりお礼を申し上げます。皆様のやさしさ、規律正しさ、勤勉さ、寛大さ、礼儀正しさなどに触れて、日本での滞りは本当に実りあるものとなりました。

私はこの公演で、オトリー兄弟から特別な役目をおおせつかり、感謝しています。独唱するように言われたとき、最初は「どうして私が」と思いました。けれ

ども、それについて祈ると、お受けすべきだと感じました。歌唱力を向上させる必要がありました。今もそうですけれど、——しかも練習する期間は3週間しかないのです。オトリー姉妹には、ずいぶん助けていただきました。私自身も毎日祈り、何時間も練習しました。その結果短期間の間に、オトリー姉妹もびっくりされるほど上達することができました。これは私がひとりで行なったではありません。

いよいよ私が歌うときが来ると、奇跡ともいえるべきことが起こりました。全然恐れを感じないのです。私はワード部の聖餐会で歌うとき、普通不安に襲われます。けれども公演のときは、天から、そして後ろにいる団員から力が伝わってきました。本当にすばらしい人々です。ずっと私に愛を注ぎ、惜しみなく援助、激励してくださいました。この公演は、私の生涯の中でも最も霊的な経験のひとつとなりました。

今回、夫が同行してくれたことに感謝しています。私は大役を果たすために、公演中十分休息をとらなければならず、あまり話すことも笑うこともできませんでした。けれども、夫は忍耐を持って助け、支援してくれました。この13日もの間、共にたくさんを経験し、また喜ぶことができました。夫と一緒に来ていなかったら、これらのすばらしい経験を分かち合うことはできなかったでしょうし、

また共に味わうこともできなかったでしょう。確かにこの業は天のお父様のみ業です。そして私たちは、天父のみ手にあつて主の器として働く者です。私たちがいつでも天父の忠実な良い僕であることができますよう祈っています。

印象的だった「幸福な人々」との出会い

—「また逢う日まで 神よ、ともに在ませ」—



ジム・アダムス

「人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(II ニーファイ 2:25)

私たちタバナクル合唱団は、このモルモン経に記されている聖句を全世界に広めたいと願っています。私たちは主を愛しており主の福音に幸福を感じているので、その思いを歌声に託しているのです。でも、日本の方々はこの聖句の意味をすでに理解しておられるようでした。

私は1980年8月にタバナクル合唱団に入団し、以後5年間に、ブラジル、北欧、カナダに公演旅行に行きました。ときどき、私はこの公演旅行の一つ一つがどれほどすばらしいものであったかを団員に

各地のたより

話します。すると彼らはうなずきながらも、ほとんどの場合こう聞き返すのです。「1979年の日本公演に行きましたか？」そして私が行かなかったと答えると、「あの公演が今までで一番でしたよ。とてもよく準備されていましたね。日本の人人もやさしくて親切でしたよ」と言うのでした。第1回日本公演に参加した合唱団員は、そのことを思い出すだけで幸福そうな顔をするのです。

そして今年の2月、第2回日本公演が決まったことを知らされました。第1回の公演を思い出すだけで彼らはどうしてそれほど幸福になれるのでしょうか。私は是非とも自分でそれを確かめたいと思います、この機会に感謝しました。そして、宝石のような島国に着いてからこのことがわかるまで、長くはかかりませんでした。

東京を歩いているとき、ふたつの出来事を目撃しました。どちらも大したことではありませんが、私にとっては日本人の心をよく表わしていると思われる出来事でした。

ひとつは朝のラッシュ時のことです。車が列をなしている交差点で、2台の車が右折しようとしていました。一方の運転者がもうひとりに急いで曲がるように、警笛を何度か鳴らしました。このふたりはきっと怒っているだろうと思っていましたが、互いに笑顔で運転していました。

もうひとつは皇居前広場でのことです。おじいさんとその家族と一緒に歩いていましたが、水飲み場の所で立ち止まりました。おじいさんが水道の蛇口に顔を近づけて栓をひねると、水が勢いよく飛び出して顔にかかりました。けれどもおじいさんは、腹を立てるでもなく、家族皆で大いに笑い、まったくかわりのない外人の私でさえもついそのおかしさに引き込まれてしまうほどでした。

幸福な家族に、幸福な人々。これが、初めての日本旅行で私が受けた印象でした。そしてもうひとつ、ほかの人を幸福にし喜びをもたらす日本人のすばらしさ。

大阪では、私たちが飛行場に着くとたくさんの教会の方々が出迎えてくれました。この熱狂的な兄弟姉妹の姿を見て、

私の心は喜びでいっぱいになりました。名古屋の会員たちは、私たちのために貴重な時間を割いて最高の食事を作ってもてなし、歓待してくれました。

東京では神殿職員が休日にもかかわらず出勤し、エンダウメントの儀式をしてくださいました。私の人生の中でこれほど心を動かされた儀式は、いくらありません。

会員、非会員を問わず、私たちは人々から数々のもてなしを受け、親切にしてくださいました。ここに書いたものは、ほんの一部です。そのお礼に、私たちの歌によって皆さんに幸福な気持ちを感じてもらえたらと願っています。

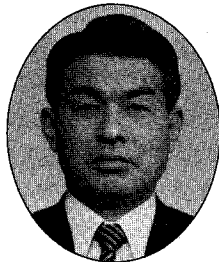
私たちには、聴衆の皆さん一人一人の明るく笑っている顔が見えました。また、皆さんは舞台から最後の団員が退場するまで拍手をしてくださいました。しかもあの暑い日、筑波の野外ステージが会場だったときにもです。

私は求道者の方々にタバナクル合唱団のテープをお贈りすることができました。

両耳に補聴器をつけた老紳士と、30代の魅力的な女性と、14歳の活発な少女です。また、すばらしい会員の方々や宣教師たちと握手をしました。今までタバナクル合唱団が訪問して出会った人の中でも、一番幸福そうな人々でした。

どの公演も最初の曲は、「地球に住むすべての人々、明るい声で主に歌う……神のみ前に来りて喜べ」という歌詞で始まるものでした。私たちの使命は、すでに幸福を感じている人に福音の喜びを紹介することです。私たちはその代わりに、その人々から大きな喜びをいただきました。たくさんの人々との触れ合いが実を結び、また、聖霊の力によって多くの人人の心が救い主イエス・キリストに向けられますようにお祈りします。

また、日本の忠実な聖徒の皆さんの心に、最後の曲がいつまでもこだましますように。「また逢う 日まで 神よ、ともに在ませ。」(「讚美歌」84番)〔ジム・アダムズ：ユタ州在住、36歳、2児の父親〕



「わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」

—タバナクル来日を伝道の機会として—

名古屋西ステークス部長 堀田 徹

今年の夏のタバナクル合唱団の来日公演は、名古屋の地におきまして1979年以来の大きな出来事でもございました。

私も妻や母と相談して、招待できそうな人々をリストアップいたしました。80キロ以上も離れた地に住む姉夫婦2組、そして妹夫婦、会社の社長、店長、大学教授の奥さん、妻の友人などを列挙しますと25家族以上にもなりました。次々に電話でモルモン・タバナクル合唱団について説明をいたしました。姉夫婦も休暇を取って聴きにきてくれることになりました。自分たちの呼びかけるべき人々は、ほとんど電話をしました。切符は発送し

たり、持って訪問したりして、手持ちの切符はすべて来ていただく方の手元に届けてほっとしていました。あとは美しい歌声を聴くばかりです。

そして、いよいよ明日は、合唱団が名古屋に来て公演をするという前の夜8時15分を過ぎた頃、電話のベルが鳴りました。それは、監督からの電話でした。

「どうしてもなんとかしなくてはならないタバナクル合唱団の切符が数枚残っているんです。」

私は尋ねました。「数枚って何枚のことですか？」

「4枚、ええ一つと5枚、いえ、合計で6枚になります。今まで一生懸命売っ

各地のたより

てきましたけれど、6枚だけ残ってしまいました。」

この監督は、ワード部の会員たちと共に300枚近くの切符を売るように懸命な努力をしてこられた方でした。

彼はさらにこうつけ加えられました。

「今となっては、たとえお金は回収できなくても、なんとか出かけてくださる人を探していただけたらと願っています。」

電話の切れたときには8時半頃になっていました。明朝は、合唱団員をお迎えすることやその準備で、切符を売り歩く時間は今夜を除いてもうありません。それもあと1時間半くらいの間で、それが過ぎれば人々は寝てしまいます。それですぐに妻と話し合ってお隣から次々に電話をかけてみました。しかし、色よい返事は返ってきませんでした。

お隣では、「私も、イギリスから帰ったばかりで、明日は3つの大切な用事がありますので、とても残念ですけれど都合がつかいません。せっかくお誘いいただいたのにおねえ」とのことでした。

お向かいでは、「きょうの明日ではね、どうしても仕事の都合がつかなくて」と断わられてしまいました。これはやはり無理かなあと思いつつも、勇気を出してさらに電話をかけました。

そして今度は妻とふたりで夜の道に飛び出して戸別訪問を始めました。すると2軒おいて右隣の奥さんは、

「明日は、岐阜のお友達と昼食会をすることを前々から約束してしましてね。でも公演は何時からですか?」

公演が3時(午後)から始まることを告げると、「もし、トンボ返りで帰って来たら、なんとか間に合うと思います」と言うていただきました。

左隣のお宅では、「早速行ける人を探してみます」と言って、しばらくしておふたりが行ってくださるとのことでした。これで6枚中、3枚はなんとかありました。

しかし、あと残りの3枚はどうしたものかと思いました。するとふと、今までまったく対象外にしていた70歳近くになる叔母のことが頭に浮かんできました。でもその叔母は、2週間ほど前に夫を

失って悲しみにくれている人でした。それに70歳近くにもなって外人の英語の歌など、どう考えてみても聴きそうにはありません。おまけに彼女は血圧が高く、190もあると言っていました。どれを取ってもタバナクル合唱団とは縁遠いものでした。私は、だめだなあと思いましたが、なぜか、ふと彼女に電話をするようにと強く感じました。「みたま」のささやきのように。

このことを妻に話して、「増田の叔母さんはどうかね?」と尋ねると、妻は「そうねえ、ご主人を亡くした悲しいときだからこそ、タバナクルに誘ってあげたらどうかしら」と申しました。

どう切り出すべきかと戸惑いながらも、とにかくダイヤルをいたしました。私はタバナクルについて叔母に説明を始めました。それが世界で一番と言われる大きな合唱団であること、アメリカ大統領の就任式やロス・オリンピックの開会式で歌ったことなど……。すると叔母は、

「ふんふん、知っているよ。新聞でもテレビでも宣伝しているあれでしょう。私も若い頃にはよくコンサートに出かけたよ。好きでねえ」と思ってもみなかった返事が返ってきました。

「今まで行く機会もなかったのだけれどね。今、大阪からふたりの孫たちが来ているでしょう。特に上の女の子は音楽が大好きで、タバナクルに行きたい行きたいとずーっと言っていたんだよ。是非一度徹さんに電話して聞いてくれってせがまれていたんだけどね。そんなこと頼むのは悪いと思ってね。迷惑になるかと。」

私は心の中で「いいえ、ちっとも悪くなんかないんです」と思わずつぶやきました。今までどんよりしていた暗い雲が吹き飛んで行くのが感じられました。そして、一条の光が温かく胸のうちに差し込んで来ました。

「それで明日の切符あるの? もし、都合がついたら2枚ほど分けてもらえないかしら。そうね、昼間の切符なら私も行ってみようかしら。3枚あるの?」

私の手に残った切符は3枚でした。私たちは電話を切ると急いで車に乗って叔母の家を訪ねました。叔母は玄関の明かりをつけて待っていてくれました。そして何度も礼を言って、3枚分の代金をくださいました。私は、その足で、そのお金を持って監督のところまで走りました。

何だか急に体がふわりと軽くなったような気持ちになりました。彼女もやはり神の愛する子供でした。タバナクルにはとても行きそうもない人と考えた私の人間的な考えとは、あまりにもかけ離れた神の思いでした。

イザヤは主から靈感を受けてこう語りました。

「わが思いは、

あなたがたの思いとは異なり、

わが道は、

あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。

天が地よりも高いように、

わが道は、

あなたがたの道よりも高く、

わが思いは、

あなたがたの思いよりも高い。」



各地のたより

(イザヤ55:8-9)

教会員でないたくさんの人々にタバナクルのことを知ってもらいよい機会となりました。叔母は公演から帰ってくると、「本当にすばらしかったねえ、もう感動してしまって、孫たちもそれはそれは大喜びでね」と心から喜んでくれました。

また、岐阜の友達との昼食会を早々に引き揚げて、タバナクル合唱団の公演にトンボ返りで駆けつけてくださった奥さんは、「私は、もう、あまりにすばらしく

て涙が自然に流れて流れて仕方がなかったんですよ。最後のハレルヤコーラス(「リパブリック讃歌」)は、一緒に歌ってしまいました」と。

タバナクル合唱団の来日は、確かに主の予言者の啓示を通してなされた神の伝道の業であったと証します。主はこのようにしてみ業を進められます。神は実に生きていらっしゃることを証します。

(ほった・とおる 1985年9月15日の大阪・名古屋地区大会のお話より)

ステーキ部ずつが紅白に分かれ、種々の競技に汗と熱気がうずまき、東京、東京南、横浜ステーキの連合「白組」が勝利を飾った。

一人一人の心を広げ、心を通わせた活動には、2日目夜のダンスパーティーがあげられるだろう。昼間の運動会でちよっぴり日焼けした兄弟、姉妹の姿がやさしく揺れていた。もうひとつ、さわやかな印象を投げかけたプログラムに、ヤング・スペシャルのための活動の時間があつた。約80名のヤング・スペシャルが一同に会してゲームや記念撮影をし、その時間は、落ち着いた、和んだ空気が流れていた。

セミナーの時間には、渋谷インスティテュートからの謝花良康兄弟、吉野和洋兄弟の両講師をはじめとし、地区代表、各ステーキ部長の8名で7つのクラスが準備された。セミナーを通して語られた言葉の中には、「デートは、良きものです。目的を持ち、知恵を使うとき、良きデートをすることができます。」(吉野兄弟)「何によって、神の栄光を表わすかと考え、実行しようとするとき、自分の力以上のものが発揮されます」(新山兄弟)など、講師の率直な意見やアドバイス、厳肅な証が兄弟、姉妹たちの心を貫き、伝道に出る決意をした人、神殿結婚を目標にすることの大切さに感銘を受けた人、またバプテスマを受ける決心をした人々がいた。霊的に高められた参加者には、このあとのキャンプファイヤーのときに屋外に出て見た富士の稜線、夜空に輝く星の多さに、主の深遠な愛を感じずにはいられなかったようだ。

4日目の朝からの証会は、5部屋に分かれて行なわれ、全員が証を分かち合うこととなった。中には、証を歌で表現する人やグループがあつた。また、バプテスマの決意を表明した参加者に思わず拍手が送られた会場などもあつた。「天の王国にいるみたいなきもちでした」と感想をもらす人もいた。

こうして4日間のカンファレンスを通して友人の和を広げ、力強い証を得て、参加者はそれぞれ様々な決意をしたようであつた。「顔を知ってる人たちのこと



東京・静岡地区独身成人「富士グリーンカンファレンス」6ステーキ部360人が参加

「6つのステーキ部の独身成人がひとつ所に集まり、カンファレンスを開きたいという願いがかなうときがやって来ました」という相良健一地区代表の開会の言葉で、8月14日から4日間にわたる富士グリーンカンファレンスが、富士緑の休暇村に、静岡、横浜、東京西、東京、町田、東京南の各ステーキ部より約360名の独身成人が参加し開催された。

「燃やせ信仰、つかめ愛!」をキャッチフレーズに進められたこのカンファレンスにあつて、25に分かれたグループのそれぞれの活動とそれをリードしたグループリーダーの準備と動きは目を引くものがあつた。一つ一つのグループには個性あふれる名前がつけられ、ユニークなグループ旗が用意された。中にはそりい

の法被や点滅灯を使った名札というアイデアもあつた。

カンファレンスは、グループ単位で活動が進み、交歓会やレクリエーション活動に加えて、早朝ダンスパーティーや夜中のきもだめしなどを楽しむグループも現われた。

各ステーキ部で準備されたプログラムも参加者を啓発し、燃えあがらせる機会となった。1日目夜のカルチャーナイトでは、「光」をテーマにした発表が繰り広げられ、歌や劇、スライドショー、ダンス、ミュージカルなどがあり、今回は色彩を使った影絵の中にイエス・キリストのシルエットをうまく表現した町田ステーキ部が優勝した。一方、横浜ステーキ部が担当した2日目朝の運動会では、3

各地のたより

●歌や踊り、スキットがにぎやかに繰り広げられたカルチャーナイト(富士緑の休暇村で)

月だった。年に1度のこのサマーキャンプ、スタッフたちも昨年の9月から準備しており、参加者以上に彼らは相互親睦という目的を達成したようだ。「外部の人」が取材に来たというのは初めてなので、求道者のひとりとして参加してほしいとのことだった。一体、この4日間に何が起こるか、多少不安もあったが、それ以上の好奇心で参加した。(私の仕事でもある)

教会の専従者の人もいたが、ほとんどが学生であり、勤労青年である。特に、「仕事」の都合で4日間の休暇というのは厳しいらしく、相当の決断が必要だったようである。

10人から20人単位でグループが作られていて、それぞれのリーダーたちが考えた思いのグループ名がつけられていた。「お祭り出張所」とか「元気」とか、かなり「世俗」にとっぷりと浸った感じである。

ケント・デリカット氏も町田のステーキ(地域の単位・テントを建てるときの中心になる柱の意)部所属だそうで、このキャンプにもちょっと顔を出していた。

4日間のスケジュールを紹介しよう。

1日目、正午過ぎから受け付け。午後3時から開会式。グループ別で自己紹介。夜は「カルチャーナイト」という名の「学芸会」。それぞれの地域教会別で歌や踊り、劇、スライドによる教会紹介など、結構手の込んだもので、レベルも高い。

2日目、午前中は紅白に分かれての運動会。日射病で倒れる人や騎馬戦でケガをする人も出たすさまじいものである。20歳代の青年の特権か。

午後は、各グループでゲーム。各人、感心するほどいろいろなゲームを知っている。サークルリーダーとして不可欠な教養なのだろう。

そして、夜は社交ダンス。完全にアメリカ流である。こうしてスマートな男性、素敵な女性が出来上がっていく。厳しいものだ。

3日目、午前中は、各グループごとで、オリエンテーリング、ピクニック、サイクリング、テニス、野球と、それぞれの

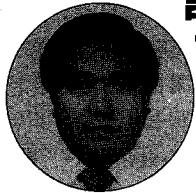
実現のために積極にご指導くださった地区代表をはじめ、各ステーキ部長会に感謝します。

このような大会が恒例となるよう、さらにはこれがますます発展するよう期待してやみません。(レポーター：町田ステーキ部町田第1ワード部・服部行彦)

は、もうよく知ってると思って、さらに知り合おうとはしないみたい」と静岡のある姉妹は言っていたが、今回のように初めて知り合う人たちの多かった大会は、より一層意味深いものになったようだ。

1年間を通じて準備してくださった実行委員会の方々に感謝すると同時に、6ステーキ部合同のサマーカンファレンス

記者の目で見えた「富士グリーンカンファレンス」——「ジョセフ・スミスの霊を身近に感じ、強い感動を覚えた」



宗教新聞記者 平井 敏雄

今年(1985年)は戦後40年。この暑い夏をいろいろな思いを持って過ごした人も多いだろう。特に、日航機の墜落事故もあり、人間の運命の不可解さを考えさせられたものである。

これからレポートする「モルモン教会(末日聖徒イエス・キリスト教会)の青年たちによるサマー・キャンプ」は日航機事故のあった2日後の8月14日から17日までの3泊4日、「富士緑の休暇村」で開かれた。ちょうど事故機が上空を通過したコースにある。樹海で有名な青木ヶ原の河口湖寄りのところで、北側にある足和田山の穏やかな緑はさすがに、南側に連日見えた富士山は、あまりに近すぎて、ちょうど、映画「十戒」で見たシナイ山のようにであった。

東京・静岡地域から約360人の独身青年

男女(18歳以上)が集まった。このキャンプは会員相互の親睦を深めるのが目的で「結婚」に至るカップルが生まれることもあるそうだ。

「モルモン教会」の場合、伝道に専従する期間を青年時代に2年課している。これに参加するか否かは自由であるが、教会としては奨励している。18歳から25歳をヤングアダルトといい、この期間に「伝道」に出る人は多い。26歳以上をスペシャルインタレストといい、男性は「結婚」と「仕事」、女性の場合は「結婚」して善き家庭を作ることが勧められている。

また、会員同士の結婚であるが、相手は自分の意志で決めるそうだ。

会員の「研修」をどのように行なうかで、それぞれの教団の個性が出ていて興味深い。取材を申し込んだのは昨年の10

各地のたより

好みのレクリエーションを選択する。

私のグループはオリエンテーリングであった。地図と磁石はリーダーに任せて、ほかの人はピクニック気分だ。

しかし、青木ヶ原を抜けて、紅葉台、足和田山のふもとと、約2時間、たっぶり歩いた。途中、コースをまちがえて紅葉台まで登り、西湖を展望できたのは辛いであった。必死のリーダーの頑張りもあり、また、従順に我々も従って駆け足をしたりと、しかし、時間オーバーで成績は4位であった。

長い昼休みがあって夕方からセミナー。「研修会」というからには連日の講義を予想したのであるが、「講話」は、あとにも先にも、この3時間だけであった。

私が参加したセミナーの講師は「新山靖雄」という人で、ステーキ部のリーダーであり、ある会社の経営者でもあるそうだ。40過ぎて、モルモン教会には1960年頃入ったそうである。語る内容は原則的なことであるが、実践に裏づけられた言葉であるから聞く人の心に響く。参加した青年たちにとって、あまり多くの「ことば」はいらない。この4日間のキャンプを引き締めるには3時間で十分であった。

夜はキャンプファイアー。空は雲ひとつなく、天の川をはっきり見える。初めて「天の川」を見たという人もいて感動的な空であった。

4日目は、午前中「証会」、そして、閉会式、解散である。60人単位、5教室に

分かれての証会。

司会者はひとり2分を強調した。窓からは富士山と樹海が見える。「新しい歌」を紹介するグループでの証もあり、皆の霊も光り輝いている。ジョセフ・スミスの霊を身近に感じ、強い感動を覚えた。

ひとり2分の約束どおり終わって、司会者の方が慌ててしまった。めずらしいことだそう。

私も求道者のひとりとして証させてもらった。

このサマーキャンプ(グリーンカンファレンス)に参加するには相当の決断が必要であろう。自分の結婚相手を見つけないと目先の結果だけを求めて来た人にとってはキビシイ現実しかない。

しかし、人生の分岐点にある青年たちが横の連帯を得るためには、一人一人がより大きな目標を持つ必要がある。その大きな目的は、ある人にとっては結婚であり、ある人にとっては仕事であろう。自分の人生をどう生きるのか。そういう目的意識を発見し得た人は幸福だと思う。

8月8日、私は富士の宮浅間神社、湧玉池で「みそぎ」をしている。ある神道グループが主催で、霊学研究家たちの誘いで参加した。「モルモン教会の研修会」とは何の関係もないが、霊峰富士の南側と北側で、それぞれ「水」と「霊」に首まで浸って「みそぎ」と「洗礼」を受けたことは確かである。戦後40年目の夏を有意義に通過したと思う。(ひらいとしお 1948年生まれ)

聖徒らの集う開催地をシオンとし、「エノクの市のように天に取り上げられよう」という壮大なものでした。

7月27日、土曜の夕べには、その前夜祭が行なわれました。やむを得ない事情でカンファレンスに参加できない人にはその楽しさの先取りを、また初参加の人にはその不安を解消してもらい、みんなでカンファレンスに向けて助走をつけようというものでした。70余名が参加し、ゲームやダンスをして楽しいひとときを過ごしました。

8月14日、いよいよカンファレンスの始まりです。その晩に行なわれた発表はすばらしいものでした。歌と踊り、スライドの構成でオープニングを飾った川越ワード部、教会員の1週間を生き生きと描いた中野ワード部、沈滞した状態からカンファレンスに向けて燃えあがった過程を再現して見せた浦和ワード部、また「ネバー・エンディング・ラブ・ストーリー」というオリジナルの劇でモルモン経を証した豊島ワード部や、独身成人で集会がほとんど持てなかったにもかかわらず「アヒルの行列」を発表して童心に返ることを教えてくれた越谷ワード部など、みな苦勞が忍ばれる、胸を熱くするような内容でした。

2日目は、ワード部を越えて構成された兄弟姉妹合わせて10人程度の12のグループが、それぞれの個性を発揮しました。グループ対抗のオリエンテーリングに知力、体力を使ったあと、昼食は野外炊事となりました。午後は得意種目ごとに分かれて球技大会を行ない、夜には指導者である大石兄弟のお話のあとに、私たちにとって「エンジョイ」とは何かについて語り合う機会を持ちました。そこでは、私たちのすべてに、真の喜びとは、またその喜びの共通の源について教えてくれる不思議な力を感じることができました。3日目、やや曇り空の下、私たちはバスで富士山の5合目に向けて出発しました。そこから徒歩で6合目まで登り、あとは宝永山の火口を見ながら下ってくるコースです。これは、今回のカンファレンスで最も印象深かったという声が多く聞かれた計画でした。途中、交通渋滞に

東京北ステーキ部サマーカンファレンス —「喜び」の本質を見つめた4日間—

「あなた方は、主にあっていつも喜びなさい」(ピリピ4:4)

去る8月17日、御殿場の国立青年の家において開かれた東京北ステーキ部の独身成人サマーカンファレンスは、合言葉を「レッツ・エンジョイ!」に、天候にも恵まれた4日間のプログラムを無事に終えることができました。参加者は途中

参加も含め128名で、初めて教会の活動に集った求道者も含めて84名が証を述べました。

東京北ステーキ部には5つのユニットがありますが、各ユニットから2名の実行委員が召され、4月の初め、委員長の高橋賢次兄弟から各委員にカンファレンスのビジョンが語られました。それは、

各地のたより



●御殿場の国立青年の家でグループごとの発表を行なう東京北ステーク部の兄弟姉妹

した。

こうして、2時間半にわたって熱く燃えた証会を最後に、4日間の東京北ステーク部独身成人サマーカンファレンスは幕を閉じたのでした。

多くの兄弟姉妹にとっては、参加すること自体が犠牲であり、他者への奉仕であったカンファレンス。いつしか各人が自分の持てるすべてを出し合い、お互いの掛け替えのない価値に気づかされたカンファレンスでした。私たちが「喜び」の本質を通じて、主イエス・キリストへの思いを深める機会を神様が導き恵んでくださったことを心から証したいと思います。(レポーター：東京北ステーク部サマーカンファレンス副実行委員長・吉成比路志)

見舞われバスは遅々として進みませんでしたが、私たちはバスの中でガイドさんと共に讃美歌を何曲も歌って過ごしました。よきおとずれを伝える者の足は山の上にあつてなんと美しいのだろうという聖句(イザヤ52:7参照)がありますが、私たちはバスを降り、数珠つなぎになった登山客の車の傍らを元気に挨拶を送りながら歩いて登って行きました。

6合目で雲を眼下に見、広大な自然にしばし我を忘れた私たちは、新鮮な空気を思う存分満喫して下山しました。雲が吹き上げられて来たり、ロマンシング・ヴァレーと名付けた、兄弟が姉妹に手を差し伸べるチャンスのある崖があつたりと楽しいこともさることながら、主の創造された大自然の中での1日は、本当に多くの恵みに触れることのできたときでもありました。

御殿場での最後の夜は、体育館でキャンドル・サービスが行なわれました。12のグループと実行委員で構成されたグループは、それぞれ何の火を自分たちが燃やし続けるか、その決意を宣言してキャンドルに火を受けました。

火のセレモニーのあとは、各グループによる出し物の発表がありました。今大会で初めて顔を合わせるメンバーも少なく、朝5時に宿泊棟を抜け出して練習に励んだグループもあつたようです。しかし、準備時間の少ない中で、メンバーの個性や才能が発揮され、創意に富んだ発表が2時間近く展開されました。

4日目、最終日の朝は食事を断ち、その時間はグループごとの反省会に充てら

れました。証会で証できるように励まし合うその姿には厳粛なものがあり、涙も見られました。そして証会のみたまに満ち、皆の目は輝き、証は述べ続けられま



●浅間牧場に遊ぶサイクリング・グループのメンバー

高崎ステーク部独身成人夏の大会

—高崎・長野・新潟地区から86名が参加—

高崎ステーク部、第5回独身成人夏の大会は「仲間の時代(とき)」をテーマに8月12-15日、北軽井沢パルコール村浅間高原地区を舞台に開催されました。長野・新潟両地方部からの参加者を含めて総勢86名が一堂に会しました。

今回、実行委員会では既成の大会には見られなかったふたつの大会運営の方法を取り入れました。第1に生活は、すべてグループを基盤とした貸し別荘で行なったことです。グループの指揮をとる

マネージャーを中心に、買い出し、食事、掃除、風呂など、参加者みずからが生活全般を管理するシステムを取りました。

第2に、大会期間中のすべての活動を、ひとつのテーマを追及するグループを中心に行なったことです。ソフトボール、テニス、サイクリング、軽音楽、演劇、ダンスの各グループが設定され、活動の指導をするキャプテンを中心に、朝から夕方まで、参加者は各グループ独自の活動を行ないました。

各地のたより

夜には全体プログラムが生まれ、初日は各ワード部、支部を代表する兄弟たちによって個性と靈性を競い合う「高崎・長野・新潟地区第1回美少年コンテスト」が行なわれました。2日目にはダンスグループによるデモンストレーションや軽音楽グループによる伴奏などの工夫を凝らしたダンスパーティーが催されました。3日目の夜には演劇グループにより「夕鶴」が熱演され、その後キャンプファイアーでゲームと歌を楽しみ、参加者みずからが創り上げた大会もクライマックスを迎えました。最終日には、短い時間でしたが、大会で得た証を述べようとする兄弟姉妹たちにより靈的な証会を持つことができました。

私たち地方の独身成人の活動は、中央のそれと比較して、地理的、人間的制限を受けることが多く、積極的な交流を図ることがむずかしい状態にあります。この大

会のテーマ別グループ活動を通して、ヨセフのように自分自身の環境を克服し、実りある活動を行なうことこそ、主が望んでおられることであると知りました。

また、大会開催に当たっては「単にプログラムを消化するのではなく、参加者一人一人が積極的に大会を作りあげ、依存ではない協働による友情を広げる」ことを目標に、実行委員会は準備を重ねてきました。現在各グループで積極的に「次はこれをしよう」「今度はいつにしようか」などの声が上がっており、ひとつの目的に向かって協力したときに育まれる友情のすばらしさと天父の助けを知ることができました。

これからも「より創造的」な大会が主の導きにより行なわれることでしょう。

(レポーター：高崎ステークス部独身成人夏の大会実行委員長・吉次真一)

から週1回木曜日夜8時～9時までの練習をスタートし、藍場浜公園では、有名連「阿呆連」の方たちの指導も受けました。

私たちは是非ともこの活動を伝道に役立てたいと思いました。そこで、教会の名を出すことをステークス部、監督会から認めてもらい、連の名前を決定するとともにいろいろな責任を決めました。また教会集合、教会で解散するようにも徹底しました。連の名前は、募集して「踊るか連」によく落ち着き、高張提燈に「末日聖徒イエス・キリスト教会」「踊るか連」の文字を入れました。

ただ、「よしこの」のリズムを奏でる鳴物の費用がかかり過ぎるために、それらを当日しか借りることができなかったのが残念でした。しかしさすが独身成人活動のメンバー、短時間で太鼓と鉦の基本リズムをマスターしたのでした。

8月13日、いよいよ本番間近、教会で浴衣と法被に着替え、少しリハーサルをしました。姉妹はほとんど女踊り、兄弟は男踊りです。午後6時30分、お祈りをしていざ出陣。市役所前はこむので、幸町演舞場の順番を取りました。

ここは、観客収容1,200人で演舞場全長72メートル。待ち時間も比較的短く、緊張しながらも初踊りを終えて感激しました。何と言っても場内アナウンス、「踊るか連の皆さんです……」を聞いたときは、本当にうれしかったです。

次に両国演舞場へと進みました。ここは観客収容3,400人、演舞場全長203メートル。約2時間待ち、その間にリハーサルを数回。午後9時20分、いよいよ踊れるとみんな張り切って踊りました。ここでライリー長老が阿波踊り賞をもらったのです。彼は体を生かしたパワフルな踊りで頑張りました。大変長かったので、みんなバテてしまいました。写真を写して教会へと向かい、お祈りをして解散しました。

14日午後6時40分、紺屋町演舞場観客収容5,100人、全長111メートル。教会を出る前に、青少年センターのサークル活動の人から「明日ん連」と合同で踊って欲しいという電話があり、これはしめた



127万人のにぎわい 徳島の阿波踊り

—「踊る阿保に見る阿保 同じ阿保なら踊らなソソソ」—

去る8月12～15日、徳島市において阿波踊りが行なわれ、私たちは13～15日、末日聖徒イエス・キリスト教会から連を作って演舞場に繰り込みまし

た。

きっかけは、独身成人活動のメンバーから、今年はどうしても踊りたいという意見が強く出たことでした。早速6月

各地のたより

と快くOKの返事をしました。約3時間待ち、リハーサルを何度かやって、午後9時20分、合同で踊りました。鳴物と人数が増えたので、踊りが見違えるほど良くなったし、「明日ん連」の人たちとも仲良くなれて良かったです。この日はここでしか踊れませんでした、みんな満足していました。

15日最終日、まず新町川演舞場へ行きました。観客収容4,900人、全長123.6メートル。おっと！ハプニングが。順番が取れないと後藤兄弟が浮かぬ顔をしています。実はまだ半分の人しか集まっていなかったのです。いくら待っても来ないので、いろいろ考えた末、幸いにも鏡兄弟のリズム感のある太鼓もあるし、私の鉦もあるということで、みんな整列し、全員そろったコールを繰り返して、ようやく係員のOKの合図が出たのでした。気を取り直してさあ出発。本部席まで来たとき、「踊ろか連の皆さんです。『あっ』外人さんがいます。皆さん拍手をどうぞ。」このとき場内は拍手の渦と化しました。体から冷汗が流れ出ていただけにこの歓待は感無量でした。目から汗がにじみ出ました。出口に近づいたときようやくあとから来た人が鉦と太鼓で応援してくれ、そこでみんなそろったのでした。ライリー長老はじめ兄弟姉妹が頑張らなければいけないと力を出し切ってくれましたので、今までで最高の盛り上がりを見せた一幕でした。

次に元町演舞場、観客収容1,000人、全長55メートル。藍場浜演舞場はこんでいて無理でした。次は幸町演舞場。続いて踊り納めの市役所前演舞場観客収容5,100人、全長116メートル。

ライリー長老と郡田兄弟の会話で、郡田兄弟が「長老、最後だから頑張ろう」と言うと、彼は少し寂しそうな顔をしました。彼は、明日の朝、カリフォルニアへ帰らなければならなかったのです。彼にとっては最後の伝道となりました。

みんな踊りたい人ばかりだったので、鳴物の人には代わってもらい最後の踊りを楽しみました。この日は4カ所も踊れたのに9時に終了、充実した内容でした。演舞場の中で藍場浜演舞場、観客収容

6,100人、全長84メートルだけ踊ることができなくて残念でした。来年はきっと踊りたいです。

宣教師におんぶした3日間でした。県外から5名、また求道者も数名参加してくださいました。いろいろと手伝ってくださった兄弟姉妹、本当にありがとうございました。ライリー長老ご苦勞様でした。教会の名前を著しく傷つけることなく、よい伝道ができた私たち一同喜んでいきます。(レポーター：高松ステーク部徳島ワード部独身成人活動代表、踊ろか連連長・大塚久)

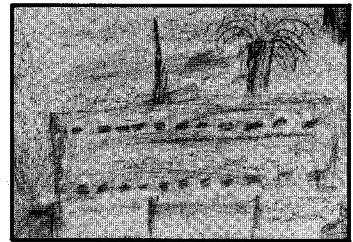
名古屋西ステーク部 系図大会 —子供たちの絵を展示—

毎年夏休みの期間中に系図大会を1回行ないます。当ステーク部が設立されて5年になりますが、年1、2回ステーク部主催による系図大会を行なってきました。今回は子供たちも参加できるようにと企画しました。大祭司グループリーダーの方々と相談した結果、子供たちには系図、神殿にちなんだ絵を書いてもらい、系図大会の日に張り出すことに話が決まり、初等協会担当の方々からも協力を得ました。

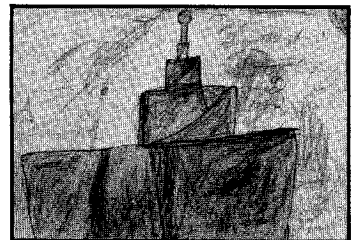
当日は100名近い出席があり、570枚余りの系図が提出されました。壁に張られた子供たちの絵を見ると、純真で、素直な気持ちをそのまま絵に表わしていて、彼らの系図、神殿、先祖を思いやる気持ちが、とてもよく表現されていました。

「幼な子のようにになりなさい。天国はこのような者の国である」(マタイ18：3；19：14参照)と言われることがよくわかります。

系図を探求すればするほど、不思議な力に助けられて多くの先祖の救いに貢献できます。そのうえ信仰も証も強くなり、真実に対する気持ちが一段と高まり、次の世に一層の希望を持つことができ



福徳ワード部
やまぐさひろし君



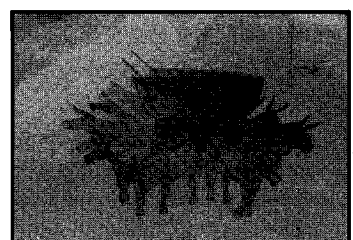
福徳ワード部
おおすぎだけし君



一町ワード部
まいいゆまこちゃん



福徳ワード部
おおすぎひろし君



高畑ワード部
たかとりきみゆのり君



高畑ワード部
おおくほゆりちゃん

各地のたより

す。

毎月、全国の系図提出表を見ますと、系図活動が盛んなステーキ部がいくつかあります。その数字だけで、エライジャのみたまがその指導者の方たちに降り注がれ、力あるみ業が行なわれていることを強く感じます。そして私たちの励みとなり、頑張ることが出来ます。系図活動とともに当ステーキは、各月にバスで神殿訪問をしております。その度に、神殿長会をはじめ職員の方々のお世話になり

深く感謝しております。

日本には昔からとても良い習慣があります。春、秋の彼岸ひがんと夏の盆にお墓へ行き、先祖の供養をすることです。また郷土には寺や寺院があり、それらの所で系図の資料を探すこともできます。この良い習慣を通して、少なくとも年に2回は系図をもう1度開いてみてはどうでしょうか。身内でだれか亡くなっている人を見つけるかもしれません。

現在、当ステーキ部では美濃(岐阜県)

の人名抄出を行なっています。およそ4万人以上の亡くなった方々の古い記録です。この責任には8名の兄弟、姉妹が召されて頑張っています。

私たちは、故マーク・E・ピーターセン長老の言われるように、「神殿に行く」だけではなく、自分の家族、自分の親族を救うという、神が課しておられる責任を全うするよう努力していきたいと思っています。(レポーター：名古屋西ステーキ部系図担当高等評議員・中島初男)

伝道活動に モルモン経を

各ユニットに定期的に配付される「会報」に、先月次のような指示が出た。

■モルモン経配布プログラム

モルモン経には人を改宗に導く大きな力がある。すべての教会員は、まだ教会員でない人々へのモルモン経の販売や配布に、積極的に参加すべきである。神権指導者や会員は、あらゆる正しい手段を用いてモルモン経を普及させ、ひとりでも多くの人々にこの神聖な書物を手にする機会を与えるように奨励されている。会員たちはこれまで様々な工夫を凝らして、モルモン経を配布する自分なりの方法を考案してきた。これは大いに奨励すべきものである。一般には、次のような配布プログラムが行なわれている。

1. 教会外の友人に会員から直接贈る。(誕生日、記念日、入学、卒業、その他特別な機会)
2. 家族が参加するモルモン経プログラムを実施する。(「聖徒の道」1977年11月号、p.564参照)
3. 図書館へ寄贈する。
4. 展示会やファイヤサイドの会場、訪問者センター、その他教会主催の行事が行なわれる場所で展示する。
5. ホテル、職場、書店、交通機関の待合室、その他大勢の人々が出入りす

る場所に置いてもらう。

七十人定員会とステーキ部伝道部が、管轄地域のモルモン経配布プログラムを管理・推進する任に当たるとよい。(「会報」1985年第21号より)

このプログラムについてはかなり前から提案されていたが、東京ステーキ部の兄弟姉妹たちは、ユニークな方法でこの提案を実行に移している。現在モルモン経配布を中心に伝道している地元出身の宣教師に113冊のモルモン経をプレゼントしたのである。ここに、プレゼントを受けた井上賢一長老の証を紹介する。

1日2冊のモルモン経配布



福岡伝道部専任宣教師
東京ステーキ部
吉祥寺ワード部出身
井上 賢一長老

専任宣教師として伝道に出た当初から、啓示と靈感のみたまによって書かれたキリストの証であるモルモン経を世に出すことの大切さを学んだ私は、伝道部の指示に従って1日2冊のモルモン経を配っていました。

続けて配るうちにお金が少なくなつて困っていると、ホームワード部の会員から「何でも手伝いますから言ってください」という手紙をいただき、早速モルモン経配布プログラムの援助をお願いする手紙を書き送りました。

するとうれしいことに愛する兄弟姉妹たちから113冊のモルモン経をプレゼントされたのです。別途で届いた手紙には、5つのワード部の会員(約25名)から贈

られた旨が記されていました。自分の体重よりも重いプレゼントを目にして、知らないうちに見えないところで払われた犠牲と信仰に心から感謝しました。

友であり兄弟姉妹である会員たちから贈られたプレゼントのモルモン経は、主の備えられた賢い手段であることと、それが人の目に小さく見えても実は偉大な奇跡をもたらすかなめ石であることを証します。

主がその完全な知恵と力とをもって世に出してくださったモルモン経に対して、私たちが信仰を示し、福音を待っている人々に主の愛を伝える手助けができることはどれほど主を喜ばせることでしょうか。そしてその行ないに対する私たちの喜びはどうでしょうか。主の示してくださったこの小さな手段に従って信仰を表わすならば、私たちは大きな収穫が得られることを知っています。神は生きておられ、私たちを愛してくださっています。これは私たちの心を真に幸福にするに十分な真理であることを証します。

編集室から

●心に残った記事の感想文、各地の話題や行事、「日々の恵み」コーナーの証、「職業と信仰シリーズ」、カットなどをお送りください。来年度1月号掲載分の締切は11月11日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。

●あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03-444-5264

原則

管理の職の真髄は手続きにあるのではなく、
原則の中に、教義の中にあるのです。

この記事は、総大会に関連して、1984年4月に行なわれた地区代表セミナーで話された説教を再編集したものです。

私 はここで、伝道の召しについて話そう割り当てを受けました。

主は私たちに、福音を宣べ伝えよという戒めを与えておられます。このメッセージは聖典の中で80回以上も繰り返されています。「この福音はあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる世の人々に宣べ伝えられん。」この言葉が80回以上も出てくるのです。これだけでも実行に移す十分な理由になります。宣教師を召す理由をもうひとつあげたいと思います。もしその召しの大切さが、十分に理解できたら、私たちはきつとすべての若人を伝道の召しを受けるにふさわしく備えさせようと、強い決心をするに違いありません。何らかの身体的障害を持っている人を除いて、すべての若人は伝道の召しを受けるにふさわしく自分自身を備えなければなりません。

しかし、世の中が今のような状況にあっては、姉妹たちにも同様の召しを強調するわけにはいきません。なぜなら、姉妹たちが安心して任務を受けて働ける場所は、どの伝道部でも限られてしまっているからです。伝道部によっては、姉妹の数の方が上回っている所もいくつかあります。だからと言って姉妹たちを召さないというのではなく、もっと長老たちの召しを増やし、長老たちの数が姉妹を上回るべきだと申しあげたいのです。

伝道の召しということについて私の言いたいことがわかっていただければ、それが単に教会の成長のためだけではなく、

教会の安定のためにも欠くことのできないものであることが理解できると思います。もしこれから話すことに一番合ったタイトルをつけるとしたら、私は「原則」という簡単な言葉を使いたいと思います。まず最初に神権管理ということについて2、3話し、それから教会を治めていくうえでそれらがいかに大切か例を挙げて話したいと思います。そのあとでそれらを伝道に当てはめて考えてみたいと思います。もちろん、これらの原則は教会のどの責任にも応用できるものです。

私たちは地域の神権指導者の仕事には際限がないことをよく知っています。それらはたとえ全時間を費やしてもやり通せるものではありません。そのうえもちろん彼らは家族も養っていかなければなりませんし、良き市民となるための努力もしていかなければなりません。これが実情だとしたら、彼らはどうすれば上手に選択することができるでしょうか。私たちが彼らに依頼するたくさんの事柄の中から、彼らはどうしたら、重要なものとそれほどでないものとを区別できるでしょうか。

ではここで地域の指導者の責任を挙げてみたいと思います。

組織を維持し、そこで働く人々の人選をする。

プログラムを管理する。

手続きに従う。

正式な方針を実施する。

原則を尊び、教える。

十二使徒定員会会員 ボイド・K・パッカー

組織、プログラム、手続き、方針、原則……これらはどれもみな重要ですが、その重要性の度合はまったく同じではありません。皆さんはそれほど重要でない事柄に多くの時間とお金を費やしたり、大切な事柄をなおざりにしてしまうことがあるかもしれません。

では例をふたつ挙げてみましょう。ひとつは私たちの責任の中でも非常に霊的な部分に属するもので、もうひとつはこの世に関するものです。

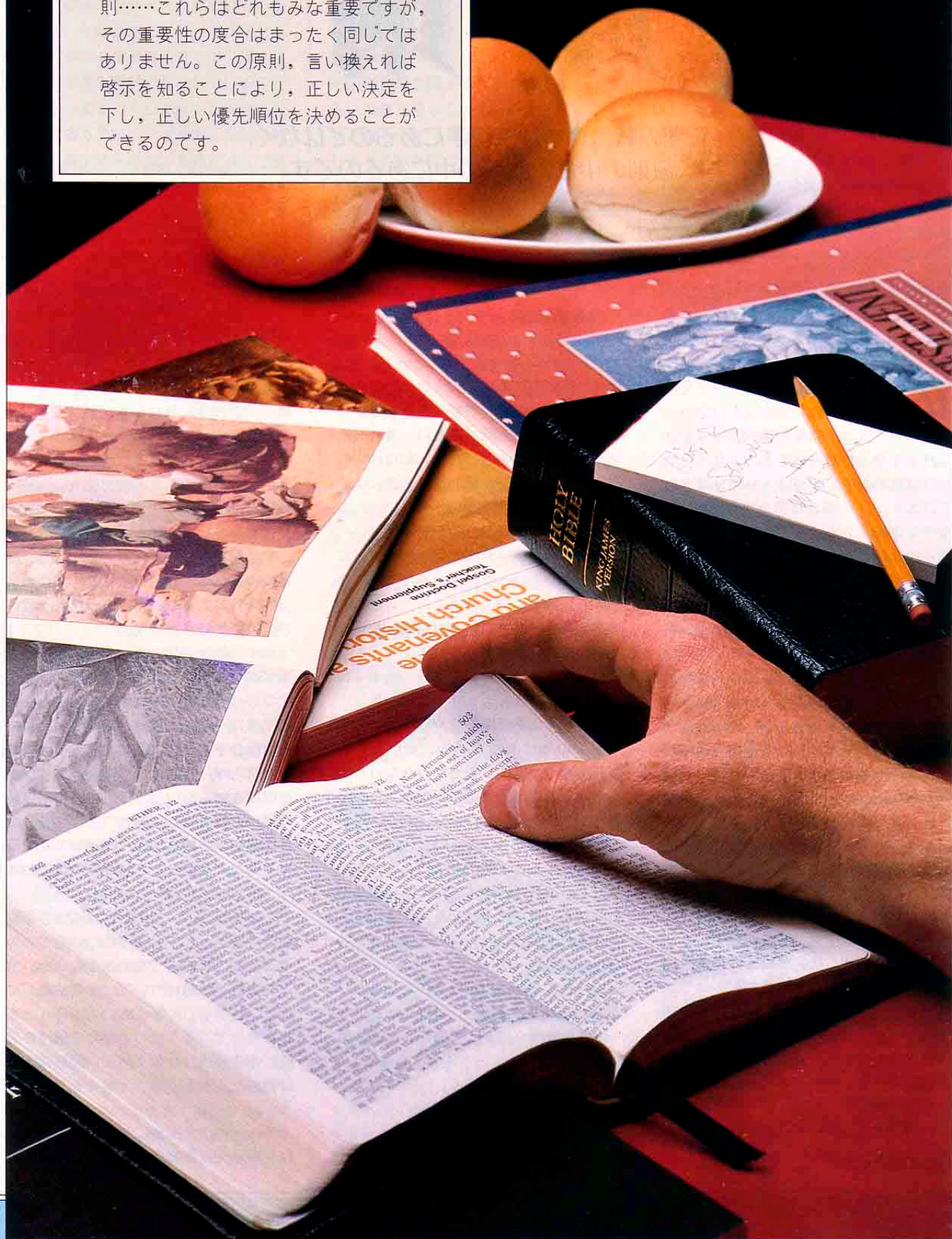
まず、教会法廷についてです。非常に重大な背罪があったときに教会員を懲戒するのは、私たちの責任です。その法廷の開催についての組織と手続きは、「教会指導総合手引き」に詳しく載っています。

ところが、そのような場合にあってはまる原則を知らないと、手引きに拘しやくしじようきりに従った教会法廷を開くことになり、たとえ適切な手続きを踏んだとしても、道をそれた人を癒いすどころか傷つけてしまうことになりかねないのです。

ここで言っている原則とは福音の原則、教義、啓示として与えられているものことです。そのような原則を知らなくて、また正義や慈悲について、叱責や赦しについて啓示として与えられていることを知らなくて、どうしてあなたの裁決を必要とするそうしたむずかしい問題に靈感に満ちた決断を下すことができるでしょうか。

そこには、手引きに述べられている手続きを越えた霊的な要素が存在するので

組織、プログラム、手続き、方針、原則……これらはどれもみな重要ですが、その重要性の度合はまったく同じではありません。この原則、言い換えれば啓示を知ることにより、正しい決定を下し、正しい優先順位を決めることができるのです。



す。そしてそれは神権にかかわるもので、神聖な力さえ持っているのです。皆さんがその原則を知らないとしたら、また監督やステーク部長がその原則に通じていないとしたら、たとえプログラムどおりに進められたとしても、聖徒を救うことはできないでしょう。

もうひとつの例を挙げてみましょう。私たちには、貧しく困っている人々で、援助を受けるにふさわしい人々を助け、世話をする責任があります。これは啓示で明らかにされています。ではこれはどのように行なわれているのでしょうか。断食献金を集めることもそうですし、福祉活動プログラムもあります。私たちはそのことをよく承知しているはずですが、手引きには、さらにそれらがどのように行なわれるべきか詳しく述べられています。ところが、状況は人によって違うのです。福音の原則を知らない、手引きの中の指示を拘り定規にあてはめて事を進めてしまい、その会員を引き上げるところか落としてしまうことにさえなりかねないのです。では皆さんが自立や儉約、独立独行といった知識を一切持ち合わせていなかったと仮定してみてください。

そのようなことを少しも疑問に思わないわけですから、これは献身がどうのこのという問題ではありません。それよりも強調点をどこに置いたらよいかという問題、つまりビジョンの問題になってきます。「預言がなければ民はわがままにふるまう」(箴言29:18)とあります。

教会運営のすべての面の土台となっているものは、福音の原則です。それは手引きの中にはなく、聖典の中にこそ見いだせるものです。それは私たちに啓示として与えられています。啓示の目的は福音の原則を知らせることなのです。

手続き、プログラム、運営上の方針、組織の形態などはよく変更されることがあります。その時々によってそれらが変更されるのはやむを得ないことであり、少しも問題ではありません。しかし原則や教義は決して変わることがないのです。

流動的で、ときには強制的に変更させられるようなプログラムや手続きの妨げに重点を置き、決して変わることのない根本的な福音の原則を理解していないと、誤解を招くことがあります。

よく注意して聞いていただきたいと思えます。私は手引きやテキスト類を無視するようと言っているのではなく、

決してそのようなことを言うつもりはありません。私が言いたいのは、手引きの中には載っていない霊的な面があるということです。主に喜んでいただくには、それを考慮したうえで責任を果たさなければなりません。

福音を知っていれば原則を理解できるようになり、逆に手引きの中の指示に対して信頼を寄せることができるようになるでしょう。これは福音を知らない場合にはあり得ないことです。このようにして、自分で考え出したプログラムや活動を自分で吟味し、効果のなさそうなものは始めから捨てていくことができるのです。

教会が非常な勢いで成長している今、私たちは境界を変えたり、プログラムを変更したり、指導者を再編成したり、もっと居心地の良い建物にするなどして問題解決に当たろうという誘惑にかられることがあります。このような中で私たちがすべきことは、教会歴史の中に見られるように、根本的な福音の原則に立ち返ることです。確かに、私たちに求められていることは、すべての末日聖徒の生活に福音の基本原則を復活させることなのです。管理の職の真髄は手続きにあるのではなく、原則の中に、教義の中にあるのです。

予言者ジョセフ・スミスは私たちにその鍵を与えてくださいました。彼は管理の職に関してこのように言っています。「私は人々に正しい原則を教え、人々にみずからを治めさせる。」

しばらく前のことですが、私はブラジルのある若い監督と面接をする機会がありました。彼はまだ27歳という若さでした。謙遜で証があり、人あたりもよく、勤勉で霊的というように、立派な教会指導者としての特質をすべて兼ね備えたような人でした。彼には教会にあってすばらしい将来が約束されている、私はそう感じました。

私は彼の顔を見ながらこう自問しました。「彼にはどんな将来が待っているのだろうか。私たちは彼のために、彼に対して何ができるだろうか。」私は心の中に、彼の数年先の姿を描いてみました。

おそらく6年間は監督を続け、33歳頃にはステーク部の高等評議員に召され、8年間の奉仕の業に就くに違いない。その後、副ステーク部長として5年間活躍し、46歳でステーク部長に召されるだ

う。そして6年たって解任され、そのあとの5年間は地区代表として活躍するだろう。こうして彼は30年間を理想の人、人々の模範者として過ごすことになる、私はそう思いました。

しかし、その間、彼は3週続けて自分のワード部の福音の教義クラスに出席することはないでしょうし、自分の神権定員会のレッスンにも3週続けて参加することはないでしょう。

兄弟の皆さん、この例に自分の姿を見ることができないのではないのでしょうか。

召しを受ける前に、福音の基本原則の知識を得ていないと、召しと並行してそれらを学んでいく時間はほとんど取ることができません。協議事項や数々の集会、予算のことや建物のことなどで、時間は無くなってしまいます。こうした外形的なことは普通見過ごしにされることはまずありません。

ところが、原則は見過ごしにされます。福音も、教義も見過ごされてしまうのです。これは危険な状態です。このようなことが今、教会の中で起こっているのです。

私は厳粛にそして冷静に警告したいと思えます。私たちは今、合衆国内だけでなく世界的に大きな障害の立ちだかる時代に住んでいます。そのような障害は日ごとに大きさを増し、世界中に満ちています。教会員の背教によって強さを増した教会外の敵対者たちは、まじめで忠実な教会員の信仰を攻撃してくるのです。その攻撃の対象となるのは教会のプログラムではありません。プログラムに対してはむしろ彼らも感心しているくらいです。彼らが集中攻撃をかけてくるのは、教会の教義に対してなのです。彼らが教義を攻めてくるのに対し、教会の多くの指導者は、どう応じたらよいかかわからないでいるのです。私は教会の広報活動に携わってきましたが、「助けてください。どうしたらよいのでしょうか」といった電話が、毎日いろいろな所からかかってきます。彼らの攻撃の対象は教義なのです。もし会員たちが教義に対して無知であれば、たとえどんなにすばらしいプログラムや建物があっても、私たちは危機に瀕しているということになります。

私は皆さんの努力をけなすつもりは毛頭ありません。いたる所で福音の原則が応用されていることも事実です。では、例を挙げてみましょう。

ステーキ部の指導者会があるときに、私はいつも若い長老定員会会長に、新しく副会長を召す際の手順について尋ねます。どのようにして副会長を召すのかという質問に、ほとんどの人が次のように答えてくれます。このことをお伝えできることを私は大変うれしく思います。

ある会長はこう答えてくれました。「まず、定員会の会員たちの名前を思い浮かべ、それから副会長として特に強く心に感じる人を選びます。それからそのことについて祈ります。」

「どうして祈るのですか。」

「主から導きを受けるためです。」

「どんな導きを？」

「正しいかどうか分かるようにです。」

「つまり、啓示を受けるということですね。」

「はい。」

「そのようなことにも啓示が受けられると思いますか。」

「はい。」

「確かですか。」

「はい。」

「でもあなたはごく普通の若者ですよ。本当に自分は神から啓示を受けられると信じているんですか。」

「はい、もちろんです。」

「前にも受けたことがありますか。」

「はい。」

「私にはあなたの確信を崩すことはできないようですね。」

「はい。」

今の言葉を考えてみてください。ごく普通の若い長老定員会の会長が、啓示とは何か、どうしたら受けられるかを知っているのです。ごく普通の若者が、幕の彼方の主に近づき、指示を受ける方法を知っているのです。

まさにこれが神権政体の本質、真髄であり、福音の原則と言えるものです。ご自身のみこころを僕たちに表わすというのは神の律法です。予言者や使徒たちだけでなく、世界中の主の僕たちに表わしてくださるのです。これは絶えず心に留め、育んでいかなければならない大切な原則です。しかし、いろいろなプログラムに追い回されると、ついそのような原則をおろそかにしてしまいがちです。

たとえ年若い会長でも聖典にしっかり通じてさえいれば、偽りの指導者についていくなどということはありません。当然そのような人は教義と聖約の次の聖句にも目を通してははずです。

「およそ誰か権威ある者より聖職に按手任命され、またその者の権威を有てることと、教会の長たる者たちより正式の

按手聖任を受けたることが教会員の知る所にあらざれば、何人といえどもわが福音を宣べんために出て行くこと、または教会を創立することを許されざるべし。」(教義と聖約42：11)

また、杓子定規に振る舞って靈感を見失うようなこともありません。46章の次の聖句も読んでいますはずです。

「されど書き誌さるるところのものにかかわらず、わが教会の長老たちは始めより、またこれより先も、聖き『みたま』の導き示したもうまますべての集会を指導することを常に許されたり。」(教義と聖約46：2)

すべての会員、特に指導者が、福音に対して知識を深め、よく理解しておくことは非常に大切なことです。

福音の勉強をする時間を見つけるのはなまやさしいことではないと思います。それはステーキ部長にとっても大変なことですし、監督に至ってはなおさらのことです。しかしそれは必要なことですし、必ずできることです。兄弟の皆さん、できるだけクラスに出席してください。また監督やステーキ部長は、少なくとも福音の教義クラスや神権定員会のレッスンは欠かさず聞けるよう、方法を見つけ出してください。

私たちはあとに続く自分たちの子孫も

「されど書き誌さるるところのものにかかわらず、わが教会の長老たちは始めより、またこれより先も、聖き『みたま』の導き示したもうまますべての集会を指導することを常に許されたり。」(教義と聖約46：2)



福音を学んでいけるよう配慮しなければなりません。福音の原則や儀式、神権の権威をそっくり後世に伝えること、これは私たちの責任です。

福音を教えることが目的となっているプログラムを支持し、推し進めてください。初等協会や日曜学校もそうです。(日曜学校については、無くすように努めている地域の指導者がいると聞いていますが、それは実に愚かな考えです) 神権会のレッスン、補助組織のレッスン、扶助協会の霊的生活のレッスン、アロン神権や若い女性のプログラム、そして聖餐会などは、福音を伝える目的で行なわれれば非常に効果があります。また聖餐会の内容は、福音に焦点を置いたものにすべきです。若い人々のためのセミナーが開かれ、今述べたようなプログラムの質を高めてくれる教師訓練プログラムに注意が向けられるまでは、監督やステーク部長は決して安心してはならないのです。これらはどれも、皆さんの配慮と支持を必要とするものばかりです。

最後にもうひとつお話ししたいと思います。ところで今述べてきたことは伝道の召しに関係のあることでしょうか。そうです、全部関係があります。

教会の若人にとって、福音の知識を完全に身につける最良の方法があるとしたら、それは伝道に出ることでしょう。伝道というのは、原則を学びながらそれを応用するという、勉強と実践が完璧なほどうまく組み合わせられたものです。この方法に匹敵するものはほかにはありません。

宣教師に召されるということは、福音の基本原則を毎日しかも一日中教えるということです。救いの計画を何度も何度も繰り返し教えるのです。

主は私たちの模範者です。どう見ても経営者には見えません。繰り返しますが、主は手腕家ではないのです。主は教師でした。その姿こそ私たちの理想であり、模範なのです。

宣教師は教師です。レッスンの準備をする教師の方が、学ぶ生徒よりもたくさん知識を得るのです。

同僚と毎日2時間を聖典の勉強に充てることを考えてみてください。どうでしょうか。宣教師になると、今までに経験がないほど聖典の勉強をします。またそのような機会は、特に指導者として召されてしまうと、二度とやって来ないの

教会の若人にとって、福音の知識を完全に身につける最良の方法があるとしたら、それは伝道に出ることでしょう。伝道というのは、原則を学びながらそれを応用するという、勉強と実践が完璧なほどうまく組み合わせられたものです。



です。

宣教師は福音の真髄に触れ、そこに基礎を置くようになります。そして神権管理の基本原則を教わるのです。教会の将来は、彼らのそうした知識いかににかかっていると言えるでしょう。

皆さんに質問したいと思います。あの若い長老定員会の会長は、福音の原則の基礎である啓示の模範をどこで得たと思いますか。それらは間違いなく、伝道を通して得られたものでした。

伝道の召しがスムーズにいくかどうかで、今後の教会の存亡が決まってきます。もしも私たちがこの業の将来に対して少しでも不安を感じているならば、健康なすべての若い男性がふさわしく整えられ、伝道の召しを受けたいと望むようになるまでは決して安心してはならないということです。

最初に私は、福音を宣べ伝えるようにという戒めが与えられていることについてお話ししました。特別な恩恵や祝福のあるなしにかかわらず、私たちは宣べ伝えるように命じられています。なぜで

しょうか。それは、私たちの義務だからです。これが原則であり、それも私たちに行動を促す原則というものです。

手続きやプログラム、方針、組織、予算、建物のことはそれぞれに大切なことです。もちろんこれらもこなしていかなければなりません。最も大切な事柄に手をつけず放っておいてはならないのです。

私たちはこれからも前進していかなければなりません。宣教師さえそろえば、私たちは今すぐにも6つの新しい伝道部を開設することができるのです。すべての指導者の方々にはそれに向かって歩みを進めていただきたいと思います。大いなる必要性を感じて、再度若い男性を、そしてやや少なめに、しかし必要数を十分に満たせるだけの姉妹たちを召していただきたいと思います。彼らは与えられている戒めに応えて、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる世の人々に福音を宣べ伝えるために出て行くのです。イエス・キリストのみ名により申しあげます。アーメン。

質疑応答

聖餐の祝福の言葉を間違えたとき、もう一度最初からやり直すべきですか。それとも間違えた部分だけ、繰り返せばよいのですか。



解答者

マーク・E・ハースト

(若い男性中央管理会幹部書記)

聖 餐式は教会員にとって非常に大切な儀式です。儀式そのものはとても簡単なものですが、聖餐を受ける人、儀式を行なう人双方にとって、その持つ意味は重要です。バプテスマのときに交わした誓約を毎週新たにすることにより、出席する人々がイエス・キリストの模範に従って生活することができるのです。

責任を受けてひざまずき、パンと水の祝福の祈りを捧げるふさわしい祭司や長老は、聖餐式に出席する人々の霊性を強めるといふ、特別な立場にあります。

聖餐の祝福の言葉は、聖句そのもの(モロナイ4:3; 5:2; 教義と聖約20:77, 79)ですから、主が私たちに、パンと水の祝福の方法を明確に指示しておられることとなります。聖餐式が非常に霊的なものになるか、あるいはただ単なる形式的なものになるかは、聖餐の祝福の言葉がふさわしく敬虔に捧げられるかどうかによって違ってきます。アロン神権の祭司のテキストでは、祝福の言葉を暗記するよう提案されています。

聖餐式とそこで捧げられる祝福の言葉の本来の意義を十分に生かすには、聖餐の目的と祝福の言葉の意味を深く研究し、理解することが必要です。大切なことは、十分な準備と練習をして祝福の言葉を宣べれば、間違いを少なくできるということです。祝福する人がたとえカード(あるいは聖典)を読むのであっても、読む人が祝福の言葉に精通し、覚えるように努力するならば、知識とともに確信が得られ、敬虔かつ霊的に祝福の言葉を捧げることができます。

間違いはだれでも犯します。けれども、その間違いがすぐに訂正されるならば、ときにはより大きな確信さえもたらし、その後で同じ間違いを犯す可能性が減ります。もし、祝福する人がその言葉を間違えたならば、それはすぐに訂正すべきです。祝福の言葉全部を繰り返す必要はありません。もし、その間違いを祝福している人が訂正しなければ、監督は躊躇することなく直ちに、祝福をもう一度や

り直すように指示することが必要です。

聖餐にあずかることは、聖餐会の最も大切な目的に数えられます。聖餐式そのものの大切さに加えて、聖餐の儀式後の時間の雰囲気によって、儀式の後に続くプログラムからもみたまとの調和が得られるかどうかが決まります。そしてみたまとの調和が得られると、福音の教えからより完全な祝福を受けられるようになります。聖餐の祝福をする人は、敬虔な態度で行なうべきです。そうすることが、聖餐式に出席する人々に祝福をもたらす助けをすることになるのです。



●本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

宣教師として、同僚との折り合いをもっと良くするにはどうしたらいいでしょうか。



解答者

ジョー・J・クリステンセン
(ユタ州プロボ、
宣教師訓練センター前所長)

同僚の宣教師との折り合いをもっと良くすることは、あなたが伝道中になすべきことの中で確かに重要な事柄です。そこで、同僚との関係を改善するうえで役立つ提案をいくつか述べてみたいと思います。

1. 同僚に仕えると決心する 自分以外の人への愛を深める最も確かな方法は、ごく親しいやり方でその人に仕えることです。同僚同士がしっくりいかなかった

あるふたりの宣教師は、片一方が病気になって1日中床に就いていなければならなかったときに、その原則を知りました。名前をブレイク長老と言いますが、彼は病気の同僚のためにできる限りの看病と世話をしました。目を覚ましたウエイト長老は、自分が熱に浮かされて眠っている間に、同僚のブレイク長老が靴を磨いてくれたり、さらにアパートをすっきりきれいに片付けておいてくれたことを知って本当に驚き、次のように話してくれました。「私は同僚に仕える者となるために、もっと何かをしなければならぬことに気づきました。その日を境に、お互いへの感謝と真の友情が芽生えたのです。」

2. 毎日共に学び、祈る 福音のメッセージには大きな力があります。もし同僚が聖典と福音の偉大な原則と一緒に祈りをもって学んでいるなら、起こり得るどんな問題も容易に解決できるでしょう。個人で、あるいは特に同僚と祈るときに忘れてならないことは、すばらしい資質を備えた同僚と共に働ける機会のあることを心から天父に感謝する気持ちです。違和感を乗り越えてうまく溶け込めるように祈ってください。

3. 違いを積極的に捕らえて意思の疎通をはかることを学ぶ だれでも他人には受け入れてもらえそうなない欠点や癖を持っていることを忘れないでください。この世に生を受けた者の中で唯一完全な方は救い主だけです。あとの人は皆完全ではありません。時の初めから私たちには違いがあり、それらを克服するために心から精励勤勉に努めなければならないことを心に留めるべきです。同僚となっ

た宣教師は、積極的にしかも心を開いて意思の疎通をはかり、互いの関係を改善するための方法を話し合えるように、いつも「同僚の長所目録」を持つように言われています。「あなたにとってもっと良い同僚になるために、私には何ができるでしょうか。」これはあなたがいつも同僚に問いかけなければならない質問です。

4. 宣教師として期待されていることに恥じない行動をすると決心する もしあなたが正しい原則を実践しているなら、宣教師の規則を守っていないなどと同僚から非難されることはありません。本当に大変なのは、積極的にみ業に取り組んでいない宣教師を同僚として割り当てられた人です。ある宣教師は家族への手紙の中で次のように記しています。「このところあまりうまくいっていません。同僚が朝なかなか起きず、伝道にもあまり熱意を示さないのです。」同僚にこんなことを絶対に言わせないでください。この原則を守れば、関係は必ず改善されていくことでしょう。

同僚とうまくやっていく宣教師は、どんな性格の持ち主とも立派にやっていける技術を身につけることになるのです。この経験は立派な宣教師になるために役立つだけでなく、伝道を終えた後もずっと、仕事や教会の奉仕、また特に結婚や家庭生活において学んだ技術を役立てていくことができるでしょう。

宣教師が同僚とうまくやっていけるようになれば、それはだれにとっても祝福です。みたまは争いや不和のあるところには長く宿りたまわないことを覚えてください。みたまを受けなければ、宣教師としての成功はあり得ないのです。

信仰を擁護して

七十人第一定員会会員

セオドア・M・バートン

まだほんの子供の頃、私は母からいろんな色の区別について教えられた。母は青色の物を取りあげて、これは青色ですよと言い、自分の言葉を私に繰り返させたのだった。それからしばらくして、もうひとつ別の青い物を手に取って、私にその色を尋ねた。

「緑？」私は言った。

「いいえ、これは青よ。」母は私の答えが間違っていたのを別に叱るでもなかった。

「青なの。」

「そうよ、これは青よ。」

それからまたしばらくして、もうひとつの別の青い物を取りあげてその色を尋ねた。

「黄色？」

「いいえ、黄色じゃないわ。」このときもやさしく教えてくれた。「これは青よ。」

私は「青」と繰り返した。

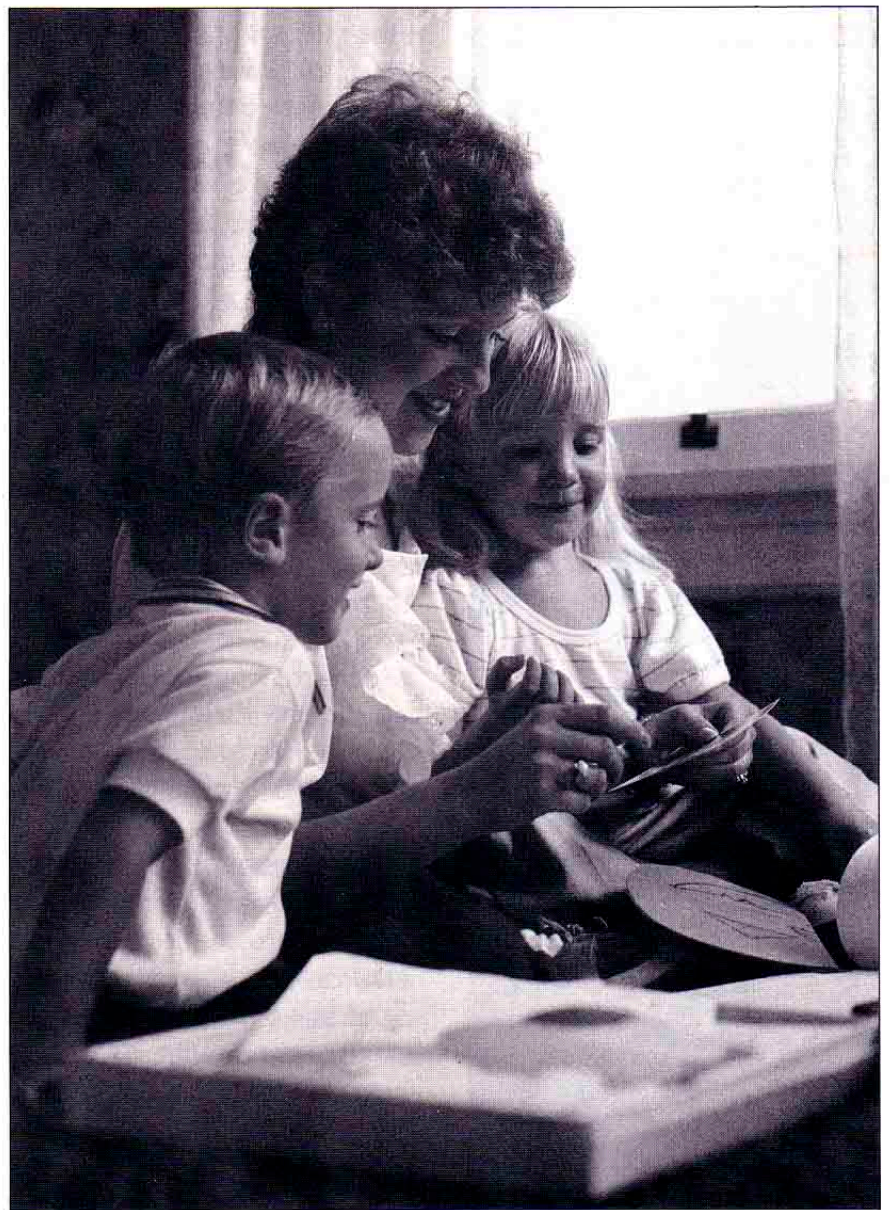
「そうよ、これは青。」

母は私をしばらく遊ばせてから、さらに別の青い物を取りあげて尋ねた。「これは何色かしら？」

「青？」

「そう、そのとおりよ。」母はよく答えたとばかりに私を強く抱いて、ほうびのキスをしてくれた。こうして私は色の区別を知るようになった。

私に色の区別を教えるために、母がどれくらいの期間忍耐したか、私はまったく知らない。ほかの子供たちよりも早く覚えたか、それとも時間がかかったか、知らない。けれどもついに、青色をほか



の色と区別できるようになったのである。今では、もしだれかがこの色の物を取りあげて何色かと聞いてくれたら、私は自信たっぷりに、「青」と答えるだろう。そして、その色はなぜ青かと尋ねられたら、「青く見えるから」と答えるだろう。ほかの人が見ても、それは青だと答えるだろう。それは、この色を青と呼ぼうという互いの申し合わせによって、青と呼ばれているからである。つまり、私たちが知っている^{ちやうしやう}と答えるものはすべて、そのように教えられてきたためである。私たちの知識は、過去に教わり、読み、聞き、体験してきた事柄に基づいている。

大学に通うようになると、私はそれまで真実であると信じ、また確信していたある事柄に対して、大学教授からあざけりを受けた。彼らは、私が幼い頃から教えを受けてきた宗教とはまったく無縁の事柄を信じていたのである。そのため、神に対する私の信仰を、単なる迷信のたわごとだと嘲笑したのだった。彼らはモルモン経を慰み物にし、ジョセフ・スミスが予言者であるという考えをあざけり笑った。しかも、聖書は文学書以外の何物でもないと言うのである。私は圧倒されてしまった。

大学教授は私に比べて学識があった。一流大学から博士号を得ていた。本もたくさん読んでおり、彼らが教えるすべての事柄には確かな解答と証拠があるように思えた。私は一介の学生に過ぎないが、彼らは長年の学究生活によって研究と経験から豊富な知識を得ている教授である。「彼らから強い印象を受けた」という言葉だけでは、当時の私の心の状態を表すのには、はなはだ控え目すぎる感がある。私の信仰と信念は大きく揺れ動き、私は確固たるものを見失ってふらふらしていた。一体何を真理として受け入れたらよいのだろうか。学識あるこれらの人人の教えを受け入れるべきか。それとも、両親や日曜学校、初等協会、宗教クラス、それに神権会の教師たちに教えられたことと、自分の体験から学んだことを信じ続けるべきなのか。

現在、私は精密科学の分野の博士号を得ている。それは、合衆国中西部の大きな大学で取得したものである。また、化学の教授としてほかの大学で教鞭をとつ

たこともある。さらに、自分自身でも研究を行ない、学生をも指導して、独自の科学の探究を行なった。そして今では、科学について、事実と理論の間には相違のあることを認めるに至っている。私はこれまでの研究と経験から、最も精密な科学の分野においてでさえ、ある種の事柄を信じるという前提が必要なことを知っている。法則と言われるものには限界があり、法則を適用するときには、必ずその限界を考慮する必要がある。私の学生時代の教授は、今日に至ってもなお立証されていない理論に基づいて話をしていたのである。彼らは、実証されていない事柄を事実として受け入れていたのだった。けれどもその頃の私は、そのことを知らなかったのである。

当時のことを思うと身震いがする。彼らは自分の信じるところにきわめて忠実だった。そのような人々に従い、人の立てた理論を真理として受け入れ、教会に対する私の信仰と立場を放棄してしまうことは、いとたやすいことだった。今はこのようにある程度知識や経験を持っているからいいが、これなくしてもう一度今まで歩んできた人生を繰り返してみろと言われてたら、私にはその自信がない。

立派な両親がいたことを、私はとても感謝している。陽気なすばらしい父母であった。両親は私たちを愛し、私たちも両親を愛していた。それで、私は幸せて何の心配もなく子供時代を過ごした。信仰のぐらついた大学時代にはすばらしい監督の助けを受け、また後に教会の大管長になった偉大なステーキ部長の指導にあずかった。とりわけ、父はやさしくて忍耐強く、私を励まし、大きな助けを与えてくれた。さらに大学には、立派なすばらしい教授が何人かいて、信仰を持ち続けるように私を励ましてくれた。彼らも、私の両親や教会の指導者と同じように、幸せな人生を送っていたのだった。彼らの中のある人々は、教会の指導者として忠実であった。そのひとりはいエス・キリストの使徒となり、ほかの人々も、隣人に心から奉仕をし、神への信仰をしっかりと守った立派なクリスチャンとして生活していた。

一方、神と教会の理想とを否定するよう私を誘った人々は、必ずしも幸せな生

活を送ってはいなかった。ある教授たちは私の信仰心を惑わし、またある人々は痛烈に私を批判した。しかし幸いなことに、私は自分が真理だと思ったことを擁護しようと決心したのだった。ひとりの教授が私の教会の教えを冷やかしたとき、私は彼に率直にこう言った。「先生、私にはあなたのおっしゃることが信じられません。試験では、あなたの望まれるような答えを書きましょう。でも、そうだからと言って、私がそう信じているわけではないことをご承知ください。私は神が生きておられることを知っています。そして、真心から神を信じています。私はあなたの講義は受けますが、自分の信じていることは変えません。」彼は私の顔をじっと見つめ、首を横に振った。しかし私は以前に宣教師として働いたことがあり、真実であると心に強く感じた事柄を否定することはできなかった。その教授に私が信じていることを立証することは不可能だったが、私はこのことを信じており、そのことで希望と慰めとを得ていたのだった。

母から、青は青であると学んだように、私は父と母から、神は神であることを学んだ。両親は私に信仰を教え、私は信じた。そして現在、私はイエス・キリストが神であり、神権の力が地上に回復されたことを証する特別な証人となっている。ここに至るまでの生活は苦しみが多く、遅々としたものだった。しかし、一步一步、神が現に生きておられ、現代の予言者を通じて語られるということ、信仰と祈りを通し、また研究と経験から知るようになったのである。

気持ちがふさいで、どちらの道に向かい、何を信じたらよいのかわからなくなったときには、これらの事柄が真実であることを理解できるようになるまで、しばらく私たちの言葉に従いなさい。主を求めらば、主を見いだすであろう。主を信じなさい。そうすれば、決して惑わされることはないであろう。信仰を保ち続けると、後に幸せを味わうことだろう。あなたがたは、愛する神から希望の光を輝かす使命を託されて、この地上に送られてきた特別な人々である。世の人人は、この多難な時代に導きを与えられる指導者を必要としているのである。

なをたためい たしはまたこの世

カレン・リン・デゴットソン

良いことをすれば両親にほめられてほ
びをもらいましたし、悪いことをすれば、
両親を悲しませ、罰を受けました。そし
て大きくなると、購買、交換、保証、契
約、物々交換など、いわゆる権利と義務
の関係について学ぶようになりました。
けれども残念ながら、私はそれらのこと
を救いの過程と同等のものと考えてし
まったのです。

ある意味では、この考えにも真理がい
くらか含まれています。確かに自分の分
は果たさなければならぬのですから。
けれども私は、すばらしい永遠の計画全
体を、この世で一般に行なわれている単
なる契約のレベルにまで引き下げてし
まったのです。私は、天父が、お金を払
えば商品を買ってくれる店主のような人、
または、天で私たちの行ないを矯正し、
合格点を取ればその計画から卒業させて
くれる監督官のような人ではないかと考
えたのです。

しかし長い年月が過ぎるにつれて、私
はこのような心の持ち方には限界がある
ことがわかってきました。事実、私が考
えたようなシステムは存在しないのです。
そのような考え方においては、1枚の
チェックリストが事の成否を左右する
とも言えるでしょう。考えをまとめるのも
行動するのも、チェックリストひとつあ
れば簡単に済むからです。ただ私の場合

には、むしろそのチェックリストのため
に、福音の完全なまでのすばらしさと力
を感じることができなかったのです。し
かも、チェックリストがあれば何でも自
分でできるという誤った考えさえ持っ
てしまいました。

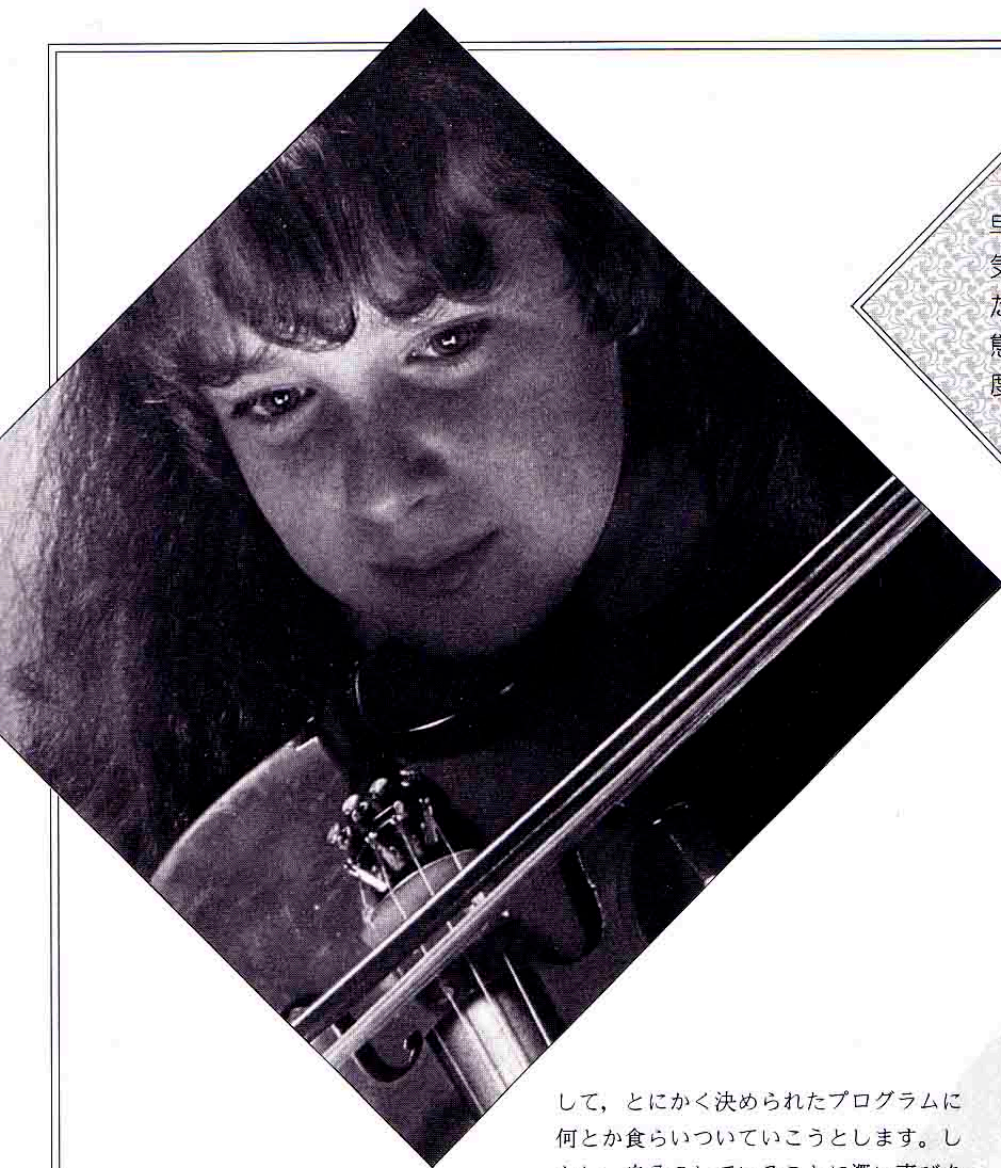
チェックリストに限界があることは、
私のバイオリンの生徒を見るとよくわ
かります。毎日午後、2、3人の子供にバ
イオリンを教えているのですが、まだ小
さいので、落ち着いて練習することがな
かなかできません。この段階の子供は、
練習を請け負い仕事のようにしか考
えていません。「きょうのおけいこはど
こまでやったらやめていいの？」それ
に対し私は常に正しく答えます。「練
習はしたいと思うからするの。そし
て、きょうはよくできたなと思っ
たところでやめればいいよ。」けれど
もこの答えが役に立たないことはわ
かっています。バイオリンを習い
始めたばかりの生徒は、練習を
しても目に見えて進歩するもの
ではないからです。

そこで、どのような練習をするに
しても、子供たち一人一人と入念な契
約を結ぶ必要が出てきます。つまり、
チェックリストを作るのです。たと
えばこのように言います。「まず
練習を5分、次に『ストリング・
ビルダー』の本を10分、次に
5分間音階の練習、最後に『やさ
しいバイオリン愛曲集』から今
練習している曲を10分。これで
30分だから、全部できたら
ノートに印をつけてもいいわよ。」

しかし当然のことながら、早く終
わらないかと時計を気にしたり、
ノルマだけを何とかこなそうと
する練習態度は、音楽を志す者
の態度ではありません。ノル
マ以上の練習をしなければ、
並の生徒以上には決してな
れないのです。そして、この
進歩は普通少しくづつもたら
されます。ある日気づいてみ
ると、「やさしいバイオリン
愛曲集」を本当に楽しんで
弾いているのです。そして
時計を見ると、予定の時間
を5分過ぎてしまっています。こ

何年も、「恵みによらずば 生くるす
べなし」(「讚美歌」70番 [英文])
という歌詞が心に引っかかっていた。
「プロテスタント的なこの歌詞が、な
ぜ末日聖徒の讚美歌に入っているのか
し。私は自分の本分は尽くしているし、
主の恵みによらなければ生きていけ
ないなんて、ずいぶん依頼心の強い
生き方だわ。」

私は、救いは完全に私個人の責任
であり、善行を重ねることによって
のみ到達し得るものであると考えた
のです。どういうわけか、救われる
のは本人次第であると考え方が、
天父に依存していると考えよりも
簡単で、それまでの私にとっては
受け入れやすいものでした。



早く終わらないかと時計を
気にしたり、何とかノルマ
だけをこなそうとする練習
態度は、音楽を志す者の態
度ではありません。

でまず頭に浮かぶのは、翌日の練習時間を5分減らすことでしょう。決められた時間を超えて練習しようなどという気持ちはさらさらないので。けれども音楽そのものが楽しくなり、与えられた課題もいつしか忘れて練習するようになると、次第に音楽家への道をたどることになるのです。

私たち自身も、中味はそれぞれ違うかもしれませんが、同じような大きな転換を経験したことのある人がほとんどではないでしょうか。義務感から何とか最低のノルマを果たしていた人が、一段高い動機から、あるいは心にわき出る愛から、そうしたノルマを超越して、考えられないような成果を上げるのです。やせたいと思う女性は、まず、自分にジョギングを課すことから始めるかもしれません。あまり気は進まないながらも、心を鬼に

して、とにかく決められたプログラムに何とか食らいついていこうとします。しかし、自分のしていることに深い喜びを見いだすまでは、本当に目標を達成することはできません。喜びがあつてはじめて、自分を拘束しているかせから解放され、決められたプログラムを超越し、今まで夢にも思わなかったことが達成できるのです。

福音も、音楽やジョギングと同じです。チェックリストを片手にノルマを何とかこなしていくという考えから抜け出せない、神と正義を愛する気持ちからわきあがる、仕えることへの真の喜びを見いだすことはできません。

またこのチェックリストを乗り越えようとする能力は、「恵み」という概念を理解するときに得られる賜のひとつでもあります。私はこの概念については、恵みの超越的でしかも不可欠な性質を強調する聖句や教会幹部の言葉を読んだときに理解できるようになりました。そして、

救い主の大きな愛と贖いの賜も理解できるようになったのです。愛が心に満ちあふれ、チェックリストを使って福音を守っていくという態度から脱皮して、喜んで、自分からイエスの真の弟子になるという態度に変わることができました。

特に助けとなったのは、ベンジャミン王の教えでした。イエスがおひとりで贖いの犠牲を通して行なってくださったことに対して、私たちはこの世で文字どおり何もなすべがないのです。また何度も何度も試みては間違いを犯すという経験を繰り返すうちに、イエスが与えてくださっている愛と赦しの大きさをしみじみと理解できるようになりました。(モーサヤ2:21参照) 戒めにどれほど従っていても、それだけでは救いを得ることはできません。救い主の贖いを通して天父から与えられている愛と赦しを得ることはできないのです。救い主が与えたもう「恵み」について、また受け身の立場から脱却して喜びあふれた真の弟子になるという機会とその必要性について、理解しなければならぬのです。私はこの知識を得ることにより、たくさんの賜をいただいてきました。

最初にいただいた賜は、自分や他人の過ちについて以前ほど厳しくなくなり、またそれほど落胆しなくなったことでしょうか。贖罪の真価がわかってきた友人は、過度の罪悪感と自己嫌悪から解放されました。

「私はタイプが下手で、タイプライターを見るのもいやでした。間違えて打つ

チェックリストを使って福音を守っていくという態度から脱皮して、喜んでイエスの弟子になろうという態度に変わりました。

とそのページ全体を打ち直すか、修正用紙や修正液を使ってせわしく直さなければならぬからです。大幅に期限を遅らせて一生懸命訂正しても、訂正の跡ははっきり残りますから、私のタイプのひどさは歴然としています。

そこで私は、古いタイプライターを自動修正キーがついている新しいものに替えました。このキーは何とすばらしい発明でしょうか。私のタイプ技術がどのように変わったかについては、ある意味では逆説的だと言えます。古いタイプライターを使っているときは、修正がむずかしくうまくいかなかったので、間違いに対していつも恐怖心がつきまわっていました。そしてその恐怖心は、間違いを減少させるどころか誘発していたのです。今では新しいタイプライターについてのコレクションテープによって、間違いを跡形なく消せることがわかったので、以前よりもはるかに速く、しかも正確にタイプが打てるようになりました。」

彼女は霊的な成長においても同じ原則が当てはまることを発見しました。贖罪について信仰が増したことにより、過ちのために無力になったり落胆したりすることがなくなったのです。同様に、私も自分の過ちや欠点により意気消沈することがなくなりました。それは、この生涯で私が成し遂げようとしていることが何であれ、「完全な者」(マタイ5:48)となるようとする努力は、主イエス・キリストが示された模範に比べれば取るに足りな

いものだからです。不完全な私たちを完成に向かって補ってくれる「恵み」が、主の贖いを通して与えられているのです。悔い改めと赦しの原則がありますから、間違いを犯しても希望が打ち碎かれることはありません。たとえ過ちを犯しても自分のために恵みが差し伸べられることがわかると、畏敬と感謝の念で一杯になります。

恵みの本当の意味が理解できると、自分が達成したことを一つ一つ取りあげて自慢しようという気持ちがなくなります。この誤った自負心について、私たちの教会ではあまり話さないようです。しかしこの自負心という言葉は、戒め一つ一つを守っている証拠となるチェックリストを人に見せびらかし、また、守った代償としての祝福を求めて主にそのリストを振りかざすときのあの気持ちを、いとも正確に表わしています。従うことの代償として主に指図をしたり、義務を負わせたりしようとする私は、何者だといのでしょうか。ベンジャミン王が言っているように、私が持っているものはすべて主にいただいたものではなかったのでしょうか。主はあらゆることを約束されなかったのでしょうか。私が最大限の努力をしても、まだその賜を受けるには値しないのです。

私が新しく理解できた最大の賜は、チェックリストを超越すること、そして主を愛し、この賜を感謝する気持ちから主に仕えるというものです。このように啓発されると、福音への取り組み方にも違いが生じます。主と担当家族を本当に愛しているホームティーチャーは、自分のチェックリストを100パーセント埋めようとするのではなく、むしろ、惜しみない思いやりのある心を持ってその家族の必要を満たそうとすることにより、結果として100パーセントという記録に結びつくことでしょう。

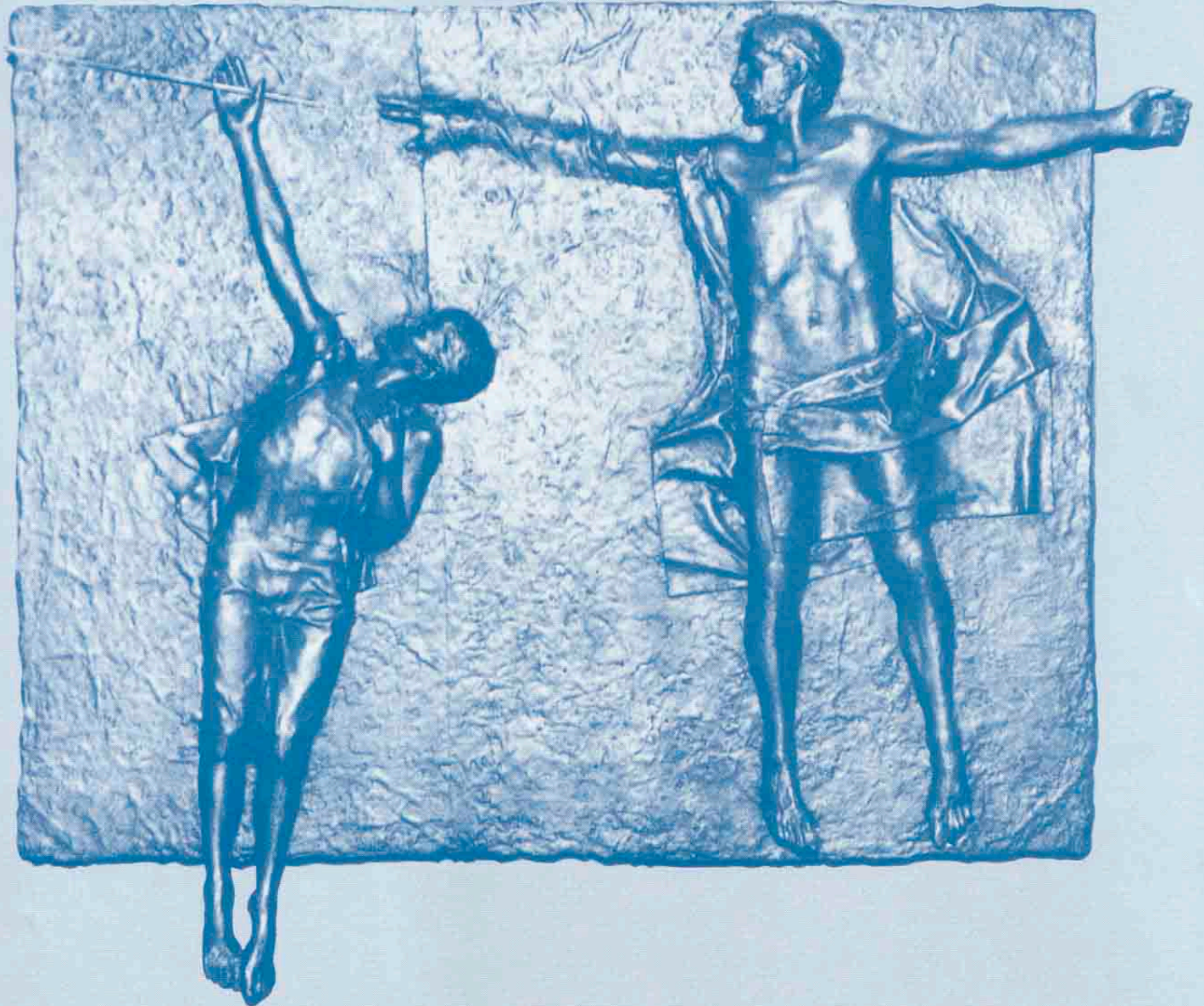
この、愛の心から仕えることがいかに大切かは、家庭において一段と明確に表わされてきます。妻に満足してほしい、成長してほしいと心から願う夫は、「理想的な夫の7カ条」を確認しながらではなく、愛と祈りの心をもって妻の必要を満たす方法を捜すことによって、理想的な夫になるのです。すばらしい妻になりたいと

切望している女性が特定の良い主婦像に自分をはめ込んでいこうとすると、途中で挫折してしまうことがあります。主婦の仕事は人によって内容がいろいろと異なりますが、その仕事を首尾よく果たすうえで助けとなるのは、家族を心から愛し、家族のためによく祈り、考えることなのです。

私たち家族には最大の祝福だと思っていることがひとつあります。それは、自分が人に何かしてあげたときに、いちいちそれを「貸し」として考えないことです。「貸し」として考えると、その「お返し」として感謝の言葉や電話や招待を期待しますが、そういうことが一切ありません。家族の中でひとりだけだれかが何かをもらったりした場合でも、みんなが同じものをもらわないと不公平などとは考えません。私たちは、何かをもらうために与えるわけではないのです。互いに愛し、互いに仕えたいと望むからです。私たちは、ほかの人々が幸福な生活を送れるように努力を続けるのです。リストや型にはまった決まりには意味がないと言おうとしているわけではありません。要点をまとめたリストや質問などは、記憶するのに便利です。初期の段階としては確かに役に立つことでしょう。しかし、真に立派な親や夫、妻、クリスチャンたらしめるには、そうしたリストや質問が口火となって展開される柔軟性や自発性や創造性が必要なのです。それができると、私たちの頭からチェックリスト的な考えがなくなり、私たちはリストを超越した自由な立場に自分の身を置くことができるようになるのです。

これは人生のあらゆる面において真実です。昇栄を目指すことにおいてもです。私たちは、恵みの賜をさらに多くいただくにつれて、自分の救いのための細々とした努力項目から解放され、天父が備えておられる務めをさらに喜んで果たすことができるのです。天父からの賜と愛によって、私たちは能力以上のことができるようになります。私はそのことを身をもって体験しています。

* カレン・リン・デビッドソン：教会音楽委員会委員、カリフォルニア・グレンデルワード部扶助協会教養教師



鉄の棒と幕：フランツ・ヨハンセン作

幕から身を乗り出している人物は、霊界で私たちの進歩を気にかけている人々を暗示している。この世と霊界の双方に突き出た鉄の棒は、この世を通して導きとなる確かなガイドであって、この男の子のように、手をすべらせることのないようにしっかりとつかまらなければならない。

(1975年、23×28センチ、プリガム・ヤング大学所蔵)

